

# 統一



第 二 百 七 號

日本と西洋との異點

内務省書記官 中川 望

自強將命と統一

海軍大佐 佐藤鐵太郎

精神修養

子爵 五島盛光

統一と開顯

文學博士 姉崎正治

信仰實驗談

大審院檢事 矢野 茂

各地活動史



閣 一 統



(式堂開日八十二月四)

求道の士女に告ぐ

爰に統一閣成る。日蓮主義者たる若輩等。肉團の胸中に懐ける活動の理想及事業。甚だ廣くして且多し。漸を逐ふて必ず實現を期せむ。若輩等第一次事業として。第一義たる道念及信仰の啓發に全力を傾注し。例月左の公開講演會を開く。請ふ求道の士女奮て來會あれ

日時 毎月第一日曜日午後一時三十分開會 主催 第一義會  
 日時 毎月十六日午後一時三十分開會 主催 妙教婦人會  
 日時 毎月第三日曜日午後一時三十分開會 主催 日蓮主義青年會

淺草北清島町

統 一 閣

自強將命と統一

四月廿八日 海軍大臣 佐藤 鐵太郎

今日は皆様と御同様に此上もなき芽出度の日であります、特に我々が崇仰の念に堪えざる日蓮大上人が、清澄山の旭の森に御登りになり、燦々たる旭日に對して大獅子吼を遊された大切な記念日に、此記念すべき盛典を舉げられ、不省なる私共が此大切な講演に加はりまするのは、潜越至極と知りながらも無限の愉快を覺へるのであります。

私の今日の演題は、自強將命と統一と云ふのであります、自強將命の四字は誠に嗚呼がまじき次第ではありませぬが、少しく信ずる所が御座りまして撰びました新しき言葉であります、自強と申上げましたならば諸君は必ず戊申詔勅を御連想になるであらうと思ひます、同御詔勅に

(1)

上下心ヲ一ニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ維レ信維レ義醇厚俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ、自

強息マザルベシ。

と仰せられてあるのであります、私が今爰に自強と申上げますのは、如斯意味ではありませぬが、此御詔勅を拜するに就けましても、私共が兼々願ふて居ります自強の意義は、此御詔勅を外にしては到底達し得られぬのであります、此御詔勅の御趣意を、天行健君子以自強不息とありませぬ易の言葉に就て考へて見ますと、原來この易の言葉は、日月の運行すること晝夜息をざるが如く、自から勵みて怠らず、勇猛精進して退轉せざる様子を云ふのであると云ふ事でありませぬので、この難有き御詔勅を下されたは、我々臣民は又如此心懸けを以て聖天子の御叡慮に御答へ申上げなければならぬのであります、我等臣民の心懸けは果して如此でありませうか、華を去り實に就くの意義は果して能く行はれて居るでありませうか、荒怠相誡むる御趣旨も果して能く遵奉せられつゝあるでありませうか、この點に就て考へ見れば、誠に以て恐懼措かざる次第であります。

自強指令の意をも遠上人の感

何に致せ、私が今茲に自強と申すものは、何人にも指をささない様に、徳を積み力を養ふと云ふのであります。言葉を変えて言ふて見れば、自分自から奮發して強くなるのであります。御詔勅の御趣意は勉強の強の字で、私の申すは強弱の強であり、甘んずるから、何となく意味合が違ふ様にあります。よくよく煎じ詰めて見れば少しも違つたことはありませんので、御詔勅の自強がなければ決して自強の意味を全ふする譯には参らぬのであります。

夫からまた將命と申すするのは、天命を將ふと云ふ意味で、徳を積み力を養ひ天命の自から来るを俟ち然る後天命を將ひ奉らんとするの意味合であります。書經に「予今有衆ヲ以テ天討ヲ奉將ス」とあります。その其語源であります。斯様に字義の講釋を致すのは畢竟するに何の益もありませんが、日蓮大上人が、我日本國には一種の靈異なる天職あるを御感得され、一闍浮提第一の本尊此國に立つべし。と觀心本尊抄に仰せられ、又進で顯傳未來記に

佛法必ず東土の日本より出べきなり  
と仰せられたのは則ちこの事であらうと信じては居る。申すは、

日本一州は印度震旦にも似ず一向純圓の機なり  
と念佛無間抄に仰せられましたのは自強の意味で、其順序より申すれば、先きに能化の徳を養ひ一闍浮提第一の本尊を立てたならば、佛法は自然々々と我日本より出るであらう、如斯して此世を統一にして如來の本願を實顯するであらうと仰せられたのであります。このので、自強將命の意義は、實に大上人の仰せられたるお言葉により明白に説明し得らるので、其結果は申すまでもなく統一の二字に歸するのであります。

然るに此の大切なる統一の二字は、この會堂の名として選擇せられ、こゝに統一闍として顯はれたのであります。果して然らばこの大切なる意味合は、必ずこの一闍により闍顯せられなければなるまいと思ふのであります。此靈妙なる意味合は、この建物より考へて見ても誠に面白く感ずるものであります。

先づ第一この建物の全體は西洋館であります。鎌倉式奈良朝式ルイ式サセツション式其他支那式徳川式等色々のスタイルが具合よく調和せられて居るといふこととあります。元來統一の意味には融合とか調和とかといふ事が加つて居るべきであります。世の中では動もすると無理鎗に併合するのを統一と考へる人があります。然し之れでは本道の統一といふものではなりません。仇敵同士が雨露を凌ぐ爲に一家根の下に立つたといふ風では統一とはいへません。假令へば住吉踊の様に色々の人が同じ傘の下に集つて嬉々として樂む様な氣持のものでなければなりませんのであります。私はあの住吉踊の玩弄物を見ても度び毎に一つの教訓に接する如く感ずるのであります。何に致せ色々の思想色々の學説が悉く一堂に集つた様な心持に融合するのは何よりも美しいこととあります。如斯寛洪な心持でなければ到底統一の意義を全ふすることが出来ぬと思ひます。少し餘談に涉りますが、此

事の三教會同のことに就きまして或る歌讀みが

神の道ふみなたかへそ外國の教に迷ふ、あはれはらから  
と云ふた方がありますが、云ふ様な心持では統一の出來様苦はなりません。畏き御製に  
四方の海皆はらからとむつふ世になど波風の立ちさわぐらん。

と仰せられた如き心持でなければ統一の主義を全ふする譯には参らぬと私は信するのであります。萩は萩桔梗は桔梗と云ふ風に百草千草咲き亂れて居る中にも自然々々と統一が行はれて居ると云ふ風でなければなりませんのでお互に相反撥する様なことは到底統一を叫ぶ資格がなからうと思ひます。又他の一方では何も箇も皆同一の形式を備へ又させようと云ふ偏狭な心懸では到底統一の出來よう筈がありません。極て出來のよい處で先づ統一と云ふ位のものであります。どうも此統一と劃一とは一見した處では大分似て居りますが實際は途方もない差で統一は包容の結果であります。

④新也、  
たゞ思ふ  
更中を  
私あめ  
風は

さて私の考へまするには統一闡も亦必ず此點に於て立派な性格を顯はすでありましやう建物自身が既に是を證明して居る如く色々な思想種々の學說色々の見解は此統一闡によりて融合せられ精選せられて煌々たる光を發して四方に輝き渡るであらうと信じます、果して然らば此統一闡は一つの甚大なる責任を負はなければならぬので、たゞしく自然々々と統一が行はるゝのであらうと云ふて樂天的にこれを待つて居るといふ風ではなりません、必ず統一の意義を全ふする丈けの覺悟を要するであらうと信じます。

然るに我國の現今の思想界言論界の有様は如何でありましやうか我國民の美質は次第々々に失はれつゝあるが如く見ゆることがないでありましやうが、誓くとも雜然として歸趣する處を知らざるが如き有様ではありますまいか獨り歸趣する處を知らざるのみならず幾多の思想や危險なる抛發的言論が盛行はれ時々刻々に我國を墜落せしめつゝあるが如く見ゆるのでありませぬ、如何に百千萬の思想家が自分勝手に其所信を述べ

おろおろ  
瓜ほす  
こころ  
かまよ  
あはれ  
かまよ  
あはれ

如く日本の庭園は座敷より眺むる如く出来て居りまするので、是等の點は固より同一には参りませんが、何に致せ西洋の庭は如何にも幾何學的に見へまするので一見整然として居りますが、日本の庭は決してさうではありませぬ、何となく不規則な所に一つの犯すべからざる規則があつて、何ともいへない風致を備へて居るのであります、統一闡は果して如何なる方針に依つて統一の目的に向つて進まらうとありましやうか此問題は對しては中々に吾々の斷言し得る處ではありませぬが、遠慮なく申して見ますれば、矢張我國特有の風味を以て最後の目的を貫徹せらるゝのであらうと信するるのであります、果して然らば、如何なる方針が我國の思想界を統一するに適當でありましやうか、是れは疑ひもなく日蓮主義でありませぬ、今多くの學者宗教家及び思想家は國家と宗教との關係に不要領な判斷を下し、元來宗教は神佛に對する人類の信仰を本とするもので、國家と關係あるものではなく、國家觀念を超越して居るものである、従つて宗教を以て國民的道德

(5)  
と云ふ  
と云ふ  
と云ふ

て見ました處が畢竟一種の戲論に過ぎぬとすれば枯梗は枯梗菊は菊といふて樂天的にこれを見のがすことが出来るでありましやうか、如何に有害無益なりと信じながらも寛汎なる考察を以て看過するのが宜しいでありましやうか、是れは確に研究すべき問題でありませぬさりながら、如何なる毒藥も用ひ方によりては無上の妙藥となるが如く、是れ千種萬別殆んど歸着する處なき思想界も指導の方法により統一されたならば、譬へば春の野に色々な花が咲き亂れて云ふべからざる趣きに満つるが如く、反て無理錯に一種の典型に壓しつけて活氣を沮喪した鉢植の花よりも、遙かに雄大にして且艶麗なるに相違なからうと思ひまするので、どうしても是等の雜然たる思想に一つの根本的統一を與へて各々其美を盡しつゝ、大なる美觀を作らなければなるまいと思ふのであります。

私は庭園の造り方などには一向趣味を持つて居りませんが如何に素人の觀察でも西洋の庭園とは其味が違ふのであります、西洋の庭園は園中にあつて賞美するを養成するには不適當であると斷言する方があるのであります、特に宗教信仰は愚民を導く方便で或者とは没交渉と連、放言する人もありますが、之れは正しく一種の偏見であります、我日蓮主義は立正安國法國冥合を第一義と致しますので、決して超國家の意味を含んで居らぬのであります、正き教を立つるのも國を安する爲である、法と國と冥合して其間に何等の差別を認めぬのが日蓮主義といふものであると私は信するのであります、人によりましては、若し果して國家を超越せざるものとすれば、是は決して誠の宗教といふものでない、少くとも高等なる宗教と稱するところが出来ぬといふ人もありますが、此れなどは確かに國家の意義を知らざるの過であらうと信じます、畢竟如斯意見は、國家といふものは國民が勝手に約束して出来たものである勢力ある一家の威壓作用の結果であると速断して、その他には國家といふものがないと信じたる結果で、少くとも我日本國の特異なる意義を悟り得ざるの過であります、日蓮上人は所化の日本を

認めずして能化の日本を認めて居らるるので、前に申上げました通り、日本一州は一向純圃の機とか、閻浮第一の戒壇とか、乃至は又佛法必ず日本より生せんとか唱へられて居りますので、此邊の消息は小日本と大日本との關係によりましたと明白に説するのであります。

日蓮上人が我國を小なる日本と唱へらるゝ、物質的判斷によつたので、誰かの小島のなど、明かに仰せられて居りますか、他の一方に於ては、我日本の存在の意味天職の見地等より御覽になる場合には大日本と稱せられ、十何倍の大さある支那を指して小蒙古だと稱して居らるゝのであります。此邊の意味合より考へて見ましても、日蓮上人の胸中に映じたる日本國の意義は決して山川とか谷とか境界を以て區別せらるゝものではなく、立派に統一の意義ある國家として尊重せられて居らるゝのであります。他の國家と同様に心得、超國家の意味を以つて見る様には參らぬので特に日蓮上人は先づ國家を祈りて後佛法を立つべ

ますまいか、御自分達は道理のよく分らぬことを土臺として學問を組み立て、居りながら、他の人が道理の明瞭ならざることを信する場合には、それを賤んで迷信といふのは沙汰の限りであります。等一の數より二等を減けば其の残りは一であるといふ如きより以上の説明をなすこと能はざる澤山の公理を土臺として幾何學を打ち立てながら、道理が分らん説明が出来ぬといふ場合に是を信するのは矢張迷信である、世の中に神佛の實在するや否やを辨へずして、これを信するは迷信であるといふのは畢竟するに自家撞着といはなければなりません。特に思想上道德上のことは數學の如き理論的説明をすべきものではない、君に忠に親に孝に朋に信なるが如きは何故にそうでなければならぬと詮索する必要がない、假令必要があつても十分に了解せぬ内に之を行ふを迷信なりとせば、仁義五常の道は悉く迷信となつて仕舞ふのである、我日蓮上人は此點に於ても理事圓滿具足の意義を充分に發揮せられて居られますので、理論と實際とをよくよく融合調和して少

し、彼國によりし法なればとて此國によかるべしと思ふべからずと仰せられて、國家それ自身の資格によりて傳法を異にすべきを明言せられて居らるゝのであります。則ち此の點に於ては、他の宗教の或は箇人的或は世界的なるとは大に其趣きを異にし王城鎮護とか興禪護國とか二三の好辭令を以て國家を利用し自己の教義を弘めんとするのは、大に其趣きを異にするので、國家觀念の養成上には最も適當なる教訓であります。七(四) *中世の宗教の歴史*

それから又前にも申しました或一派の思想家は識者と宗教とは没交渉である、宗教は畢竟迷信の固まりである、理性に背き情性に走るの實は到底免るゝことが出来ぬ今日の如く科學的進歩の大なるに關せず、既成宗教の陳腐なる信條を以て迷信的に人を導かんとするは宜しくないといふ人がありますが、日蓮主義は此點に於ても他の宗教と全然其選を異にするのであります。全體此頃の學者及び思想家は、少く過言かも知れませんが、科學真能の迷信に中毒されつゝあるのであります。

しも無理な處がなく、徒に高遠に走り、空想に耽るを許さぬと云ふ御教訓であります。所詮妙法蓮華經の當體とは法華經を信する日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身これなり。御宮仕へを法華經と思召せ一切世間生産業を治むるは皆實相と相違せずとは是れなり。天晴れぬれば地明なり、法華を知るものは世法を得べきか。と仰せられたるが如きは愈々以て明瞭であります、此點に於ても他の空想に走り或は理義の研究にのみ腐心して、世法に遠かる或る宗教に比しては其味の淺深固より同一の論ではありません。

又一派の思想家は宗教と道德とは没交渉である、動もすれば反て道德に反することを教へるものであるといふて宗教全體を非認する、偏狭なる思想家もあるものであります、かういふ人は多分純他力教の教義を以て宗教の本色と考ふる人々であらうと私は信するのであります。

*聖の境と其(イ)*  
*たの他か多非付様*

善人尙以て往生を遂ぐ況んや悪人をや  
父母の孝養の爲とて念佛一邊にても申したること未  
だ候はず

といふて教へる宗教の如きは一見したる處如何にも道  
徳上有害であるであらまじしや殊に拜佛得益の思想に  
魅せられて平然と世法を觀るが如きものあるに至つて  
は確かに有害であるかも知れぬのであるが、同一の他  
力教でも

罪人尙生る況んや善人をや  
といふのもありまする以上は一概に道徳を没交渉なり  
と謂ふ譯には参りませぬ、殊に我日蓮上人の御教訓と  
しては

外典三千餘卷所詮に二つあり所謂孝と忠となり……  
何に況んや佛法を學せん人知恩報恩なかるべしや佛  
弟子は必ず四恩を知つて知恩報恩を致すべし、  
と仰せられ開目鈔には劈頭第一に

夫れ一切衆生の尊敬すべきもの三あり所謂主師親こ  
れなり又習學すべき物三あり所謂儒外内これなり、  
思想家が宗教と道徳とは元來没交渉の如くにいひます  
るのは誠に以て其意を得ざる次第であります、特に或  
一派の人は、宗教心なき道徳は果して眞の道徳ではな  
いかといふに決してそうではない、

信仰心なくとも道徳は堅實に行はるゝものである  
と云ふて放言する學者すらあるに至つたのである、  
私は如斯淺薄なる議論を駁するの必要を認めぬのであ  
りまするが、一寸一言云ふて見ますると

成る程毎日々々平氣に行ふ位のことは、信仰心なくとも  
も出来るでありまするが、凡そ何事によらず、正邪の  
觀念中に戦つて決せざる場合にはタゞ普通一般  
の教では到底間に合ふものではなからうと思ひます、  
タゞ道理でかためたのみの訓誡では間に合ひませ  
ん、どうしても神秘的な觀念がなくてはいけませんの  
であります、生死の界に處して忠孝を全ふし節義を行  
はんとする場合の如きはどうしても一種の信仰心を要  
するは勿論であります、少くとも自己の運命を支配し  
自己の善惡を審査する自己以上のものに對する觀念と

と仰せられてあるのであります、凡そ人道は忠君愛國  
の道より孝養の道、師長に仕ふる道、夫婦の道、等に  
至る迄一として缺くる處なく、殊に忠君の義を重せら  
れ支那思想や西洋思想には到底得難き教を垂れて居ら  
るゝので、此點に對しては明白なる御教訓がありま  
す、殊に

孝子慈父の王敵となれば父を捨て、王に參る孝の至  
りなり  
と仰せられたるが如きは明かに忠君の大事を訓へられ  
て居るのであります。

是非につき、主君の存知に隨はんこそ佛神の御心に  
叶ひ、又世間の禮義を知れる手本なれと云々此事最  
第一の大事に候

と仰せられたるが如き、如何に忠義の重すべきを説か  
れたるかを證明すべきことと思はるゝのであります、  
日蓮上人の御教訓は大凡前申上げました通り、國を  
治め家を治め身を修むるの道、一として親切丁寧に教  
へられて居られぬ處はなめめでありませぬ、然るに世の

そして困難の極點に達つて迷はぬといふことは到底  
出来得るものでなからうと思ひます、此點から考へて  
見ますると平々凡々たる有様に於て人道を踏み行ふこ  
とに就きましては、信仰心を要せぬのでありまするが、  
是こそ一身の大事といふ時になりましては、自分の不  
完全にして堅固ならざる意識のみにては到底過なきを  
期することは信せざるを得ぬのであります、御製  
目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけん  
また

我心及ばぬ國のはてまでも夜晝神やまもりませらん  
又一派の學者間には、宗教といふものは悲觀的なもの  
である厭世的なものである、従つて凡ての方面に向ひ  
活氣ある發展を要する國には不適當であるといふ説が  
ある、是なども至つて偏狹な議論であると私は信じま  
す、釋迦如來が家を捨てたから、厭世的といふかも  
知れぬが、我々軍人が國家の爲に家を捨て、戦ふのも  
宗教家が家人の係累を辭して衆生を濟度するのも、同  
じ事であるので、専念事に従ふ場合に於ては、どうし

ても身を捨て家を捨て妻子を捨てなければなりませんので、決して厭世的でも何でもありません、此點より外如何なる點が、厭世的でありませうか、夫れは或一派の宗旨では、如何にも其嫌がありまするが、これは一時の時世を救ふ前に必要なもので、これを以て宗教の本體を判断する譯には参りませぬ、成る程速かに此世を捨て、極樂往生をなさんとする他力専念主義の宗旨は、如何にも悲觀的でありませうが、我日蓮主義は決してさうでありませぬ、法華經の如きは、決して悲觀的なものではない、人によりては佛教は亡國の教であるなど、放言するものがありまするが、是は事實を知らぬ議論で、佛教の盛んな時代は、其國勢の隆盛なりし時代で、佛教の衰頽の後、其國が衰へたのであります、何に致せ日蓮主義の厭世的悲觀的にあらざるは、今更論するを俟たぬのでありまするが、

今日方等經典を受持し上る乃至命を失ふ迄にせん設ひ地獄に墮ちて無量の苦を受くるも終に諸佛の正法を毀謗せず、

信持

非難する處、又宗教に望む處、如何にも尤もな點もありませぬが、一として日蓮主義を以て解結せられざるものがないのであります、斯く日蓮主義の外の宗義を非難する點は、悉く皆現今の學者の宗教を非難する點に一致するので、世の學者が宗教を非難するのは、日蓮主義を知らざるの致す處にあらうと私は信するのであります、されば、若し日蓮主義にして所統一闡より四方に光被する事になりましたならば、日蓮上人の仰せられた如く。

日本國一時に信する事あるべし其時は我も本より信じたり信じたりと申す人こそ多くおわせんすらめと覺え候

といふ事になるであらうと思ひます、何に致せ、

イ)日蓮上人の國家觀は現今の學者思想家の國家觀よりもより以上であります、

ロ)日蓮上人の道德觀は現今の學者思想家の道德觀よりもより以上であります、

ハ)日蓮上人の他力觀は自力を盡して勇猛精進するものと

如何に強敵重なるとも努々退く心なく恐るゝ心なからず、

されば我等が居住して一乘を修行せん處何れの處にても是常寂光の都たるべし

これこそ宇治川渡せし處よこれこそ勢多を渡せし處よ

などはよき證據であります、

又學者の一派の人が、他力觀の惡弊を唱へる人もありまするが、夫れは純他力一方より見れば惡弊もありませう、人が海に落ちて泳がずに南無阿彌陀佛と云ふ様なことでは困りまするが、我日蓮主義は決してさうではない、

妙樂大師曰く必ず心の堅きによりて神の護即ち強し等云々人の心堅ければ神の守り強しとこそ候へ

行學の二道を勵み候べし行學絶へなば佛法はあるべからず、

と上人は仰せられてあらせらるるのであります、

如斯色々な點から觀察致しすれば、世の人の宗教を

時に來るべき他力觀である、假令は壁に向つて物を投するが如く、自力の多少に依つて他力の作用を生ずるのである、

イ)日蓮上人の教義の根本義は信仰でありませうが、その最も重んずる處は主師親と儒外内とであります、

ロ)日蓮上人の主義は積極的で活動的であります、開頭的であります、發展的であります、苦を苦と悟り樂を樂と開くの主義であります、

是等の點より考へて見ますれば最も健全なる思想を養ふには日蓮主義によるの外なく、此渾沌たる思想界を率ひて、天命を將ひ統一の主義を全ふするは日蓮主義

によるの外はないのであるといふことは何等疑ひもないこと、私は信するのであります、是と同時に私は日蓮主義を以て正しく神ながらの道に合するを信すると同時に法華經は我御國體の説明にして、我皇國は法華

經の主義を現實する靈國であることを信するのであります。

す。

す。



## 精神修養

子爵 五 島 盛 光

私が斯かる演題を掲げてお話しするのは、少しく不似合であるかも知れませんが、併し自分は又自分として、今日まで聊か考へたこともありませうので、今日はほんの概略をお話しして見ようと思ひませう。

第一に今日は三教會同の催された後でありまして、宗教といふことが、一層社會から認められ、地方々々に依つて、三教會同らしい會合が諸處に催される様であります、我が國も一時西洋主義にかぶれた時代には、宗教は全く不必要なもので、宗教を信する者は、頑迷の徒であり、固陋の輩であると信せられてゐた、私も私立學校に居りました其時代には、實に宗教を蔑視して居りましたが、昨今に至つて多少反對説はあるものの、大に必要なものとして、之を研究し信仰を有つ様になつたのであります、由來、日本は神道儒道佛敎の三道が結合せられて、それに依つて此大和魂といふや

真似るのは、恰も楯に竹を接ぐ様なものである、今此の統一會堂は、西洋式であるが、奥にある御本尊を取出して、此西洋式の堂にかけてはうつりがわるい、矢張り從來の様な本堂が何となく奥ゆかしい、我國では上古に於ても随分支那の真似をした時代があつたが、幸ひにして國體が保存され調和して、今日の如く發達し來つた、又近世に至つては西洋かぶれもしたが、今日では復た國民が自覺し來つた、西洋かぶれ時代には、子を育てるには牛乳に限る様に思はれてゐたのが、今日ではまた母乳がよいといふ、灸はいけないと言つた人が、今日になつては又灸治も効力があると云ふ様な工合で、法華經も外國人が難有といへば、我等も早くから信じて居たのだと云ふであらう、何でも物は考へていはいぬといかぬ。

日蓮聖人が理想せられたことは、其當時行はれなかつたが、六百年餘を過ぎた今日立派に行はれ、聖人の立正安國の根本的大主義は、即ち此處に達して居る、今日は實に多數の大蒙古がある、斯かる世の中に立つ

うなものが出來たと思ひます、昔の人は祖先の位牌を拜し、時には因果の道理も聞き、又芝居でも又小説でも勸善懲惡といふ様なものばかりであつた、然るに今日となつては、善は盛へ惡は衰へるといふ様なものが掛くなつた、尤も之れは西洋の影響にも因ることであらうと思ひますが、元來西洋と東洋とは、國の成立が違つて居る、神道とか、御稜威とかいふ様な深遠なることは私は存じませんが、社會の組織より見れば西洋の初はアリアン人種の牧畜をなせしに始まり、我が日本の建國は農業に本づいて居る、故に我が國の人は非常に土地を重んずる、即ち土地を本として發達して居る、之れに反して西洋は牧畜が盛でありましたから、善い原野原野と尋ねて行く、すると向ふからも亦尋ねて來て、男女相寄り交際が初まり、此に家族が出來た、又西洋人と東洋人と、四肢軀幹の異なるのも、彼は遊牧民族であり、我は農業本位の國民であるのと、又一は氣候風土の差によるものである、斯の如く根本的原因があつて、民族が異なるのであるから、無闇に外國の風を

て我が日本帝國が一大發展を遂げようとするには、日蓮主義に依らねばならぬ、即ち女房と酒打呑んで南無妙法蓮華經といふ様に、如何なる時でも如何なる處でも活ける信仰の實現するのが日蓮主義であります、生存競争が益々烈しくなり、米價は騰貴して、一般に困るといふが、此際に於ても個人々々各々が日蓮主義で行くのが唯一の武器である、又我國は税が高いと云ふので、或外人が香港に行き、商業は横濱でやつて居るといふが、併し今日では何れの國に於ても税の無い國はない、故にかゝる時には勇猛精進の日蓮主義に依るのが必要である、昨今一般の様子を観察すると、教育が足らぬ、日本の今日の教育は簡易々々といふ趣意であります、私共の時代には非常に六ヶ敷かつたものであります、元來日本と外國とは、先生の頭腦が違ふ、外國では先生の頭が出來て居て教えるから、骨に肉をつけて教えるが、日本の先生は骨ばかり教える、消化はよいが身にならぬ、故に私は之を名けて牛乳教育と申します、元來教育は單にそればかりで行るのは誤

である、多少宗教の感化といふものも與へてやらねばならぬ、私が考へるに、東京は田舎者の寄集りでありませんが、三代以上積りて居るのは誠に少ない、而して中流以上になると、佛壇の無い家が往々ある、古より日本は祖先教である、故に祖先を崇拜する事が重大視せらるゝ程御國體を重んずる様になると思ひます、田舎から東京へ來るにも、位牌が無い様では到底大和魂は養へない、今日社會政策上貧民救済の聲が高いが、私は目下中等社會の救済が寧ろ急務であらうと思ひます、古我が國がシツカリして居たのは、中流に立つ武士がシツカリして居たからである、獨逸は大なる野心はあるが、我が國の如き大和魂が無いので困つて居ります、そこで昨今史跡保存に力を入れ、其他美術杯すべて物質的なものを以て抑へて居る、勿論物質的なものも大切であるが、國民が自覺して來れば、史蹟保存も左程まで必要でない、矢野檢事の言はれた如く、各自が本尊となり、一致共同して互に引立て合つて行くがよいと思ふ、一致共同は眞の日蓮主義で各々がかく

もいへない、昔は寒碇古など盛にやつたものですが、近來その影も見えなくなつた、學校に入るにも、私等の時代には第一高等學校と定めると、決して變更しなかつたのですが、今の學生は各校皆受験して見る、又昔は一高と云へば何處へ行つても運動に負けた事はなかつた、オートレースの時などでも白鳥の土手彌次と噂されて居た、三日の記念日にも婦人などは一人も見へなかつたが、今日では澤山見へる、風儀はよいといふかも知れないが、今少し氣骨があつて欲しい、意志の教育はもとより必要であるが、それに就ては日蓮聖人の御一代は實に手本とし、理想とするに足ると思ひます、日蓮聖人が上行菩薩の再誕として、彼のヤカマシー世の中に奮闘活動せられたのは、實に模範とすべき御人格であります、昔より名僧碩徳と呼ばれた方は澤山ありますが、何か缺けてゐる所がある、然るに日蓮聖人は毛頭缺點がない、年齢將に六十に垂んとして身延山より遙か房州の郷里を眺め、その父母を慕は

れ、國家を思ふ赤誠溢れては立正安國論となり、大義

あれば決して危険思想など起らう筈はない、私は曾て富士山に登つたことがあるが、彼山に登ると無念になり神聖となる、其證據には落し物をしても無くならなかつた、夫れが山を下りて來ればすぐ罪惡を犯す様になるといふのは、下るに随つて人心が墮落するからであります、如何に立派な口を利いても、實際に行はなければ何等の價値のないものであるが、併し人の前で言ふ時は非常に慎む、それが又實際に慎む様になる、廣告すると自ら制裁する様になる、近來意志教育と言ふことが叫ばれますが、人も生存競争中は生成して行く、夫れが反對になると衰へる、動物園中のライオンは、ライオンの本性を失つて居る、世が進歩すれば進歩するほど衰へる、アミーバーは動物だか植物だか區別がつかぬが、丁度そんな工合になる、私等の學生時代には麻布から神田まで歩いたものですが、今では皆電車に乗る、之と反對に田舎の百姓は丈夫である、進化すればダン／＼弱くなる、東京ではヤカマシーので勉強が出来ない温泉へ行かうといふ様では、意志が強固と

名分を唱へて時の政府を諫められた、實に其人格は吾人の理想として、聖人の如く自分の身に讀み行つたならば、此競争烈しき世の中に立つて、常に元氣旺盛の有様で満足と向上とを以て世に處して行く事が出来るであらうと思ひます。

日蓮上人曰く

とにかくに法華經に  
身をまかせ信せさせ

給へ(編遺一八四三頁)  
給へ(上野殿消息)

## 統一と開顯

文學博士 姉崎 正治

私は今日統一閣の落成式に臨みましてお話をすることを最も光榮とするものであります私の話さうとする所は此會堂の名に因みまして、主義信仰のある統一に就てでありますが、只今佐藤大佐が興味ある比喩を以て話されましたから、私の話すことは或は再説となるかも知れませぬ、今日の講演者を見ますと、本多上人は僧侶であり、佐藤大佐は軍人であり、五島子爵は先程大名は駄目だと言はれましたが矢張大名であり、又矢野檢事は元老の司法官であります、此の如く各方面の名士が講演せられたのでありますから、私も學者といふもの一名書物の蟲と云ふ立場から、其仲間入りをして貰らつても宜からうと思ひます、併し私は書物の蟲でありますから書物に嗜り付てお話するかも知れませぬ、が亦これが浮世の相でありませう、此浮世には種々多の人々が集まつて色々の事を爲て居る、其

色々の事を爲て居りながら一の中心點に集まつて居ります、これが實に人生の美點であらうと思ひます、今日の講演は恁る意味に於ても妙を得て居るので、此處に充分の統一が顯はれて居りはせぬかと思ひます。統一に就いては種々の方面から解釋を下す人があります、現代の日本の状態を観ますと、一方には非常に統一を主張する人がありますと同時に、又一方には思ひ思ひに離る、所謂個人主義を唱へる人があります、私が今日此講演會に來る電車の中で見ましたが、僅か一分二分の乗降前後を争ふ爲めに、殆んど敵の様に押し合つて恰も同胞兄弟の國に非ざるかの如き不作法を演じて居るものがあります、如斯個人主義の者が矢張他の方面にも顯はれて居りまして、中には國家の基礎を危くする危険思想にかぶれて居るものもあるのです、又種々の小説とか論文とかの中には親子兄弟の關係や夫婦の愛情等を無視して、親は頼みませぬのに勝手に自分を生むだもの、夫婦兄弟の愛情などは偽りで實はお互に弱點を握り合つて居るから、止むを得

ここまでには至らずし浮世にぐづぐづして居る、即ち棒を持つて擲り廻る處に尙ほ浮世を捨て兼ねる人間の心が潜んで居るのであります。

(17)

又共同生活をして居るに過ぎぬなど、云ふ風思想を抱き、之を他人にも信せさせねば已まぬと云ふが如き恰も犬の如きものもあります、而して此親子兄弟夫婦の關係を否定するやうな極端なるものは、遂には世を咀ひ人を怨むが如き結果に陥るので斯の様な破壊主義を自然主義とも云ひます。此個人主義者中の驍將……但し兵卒の無い……とも云ふべき人の「罪」といふ小説を見ますと、其小説の主人公が外出から歸つて家に這入ると、彼處には布團が敷てある此處には小供が泣いて居る浮世は恰も牢獄の如きものである、ア一浮世はしみじみ厭になつた、明朝起きたらあたり周圍かまはす棒でも持つて擲ぐり廻つてやらう、といふ自暴自棄的の嘆聲で結末になつて居りますが、今の世の中は此一例でも分る様に全く渾沌たるものである、が併し其棒を持つて擲ぐり廻つてやらうといふ心の中に未だ浮世との引つかかりがあると思ひます、若し眞に浮世が厭になつたならば自殺するが宜いではありませんか、又實際昔は自殺した人もあるのであります、然るにそ

又大阪の帝國新聞で見ましたが非常の罪人があつて北海道の集治監に送られました皆の者に嫌はれて何人も相手にする者がなかつたものと見えます、そして此罪人も亦何人の顔を見ましても誓の如くに見へ、勿論獄則などは一切守るところではない、随分と手の合はない人物でありましたが、或る教誨師の説教を聞いて驕然悔悟して遂に耶蘇教の信者となつたといふことが出て居ました、此罪人の如く人を見てイヤ／＼しい、擲つてやらうといふ心の起る間はなほ人間らしい心である、何故かといふと物をたゞけば何等かの音がするやうに、人を叩けば必ず反響がある、其反響のあるのは自分と他人との間に何等か同一のものが潜んで居るからで、其處に同情といふものが起る、若しこれがなかつたならば世の中の各の間は隔絶して終ふのであります、人を擲ぐつて見たいと思ふ其精神の中には、自

分の心と他人の心との間に何物か同じ心を求めたいと云ふ考へから、他人の心を探つて見やうとするのでありまして、即ち自然主義個人主義を唱へて居るものもまた何處かに人情相通するとの考へが潜んで居る、其考へが充分に發揮すれば其處に再び人間の真心に立ち歸つて、夫婦兄弟の人情を認むることが出来るのでありまして、この心に返れば世界は皆同胞として生存することが出来るのであります。

只今申しました個人主義の反對に於て統一主義を唱へるものがあります。そして其概端なるものは何物をも皆同じ型にして終うとであると考へて居る、元來統一と云ふのは異つて居る變化のある多種類のものを集めて元締もとぢをすることでありますが、中には締りをつけることが統一ではなくて縛りつけるものであるとの考へ持つて居る人が少くないのであります、所謂教育社會程此考に囚はれて居るものはありません、即ち教育の統一とは何でも彼でも千變一律にすることだと考へて、日本の學校教員は何者でも規則で束縛しようとする。

人の目つき一つで小僧を働かして居る、而も主人が不在になると全然駄目になるので差引勘定同しことだと愚嫉して居ました、如斯商店は外にも澤山あるであらうが今少し自由を與へるやうにしなければならぬ、自由を與へて其代り責任を持たせてそして元締をして置けば眞に統一が出来るのであります、此は一例に過ぎぬのであるが獨り商店に限らず家庭などでも同様であります、家族主義も結構だが其根本が大切であります、家族主義も形式にのみ流れて來ると色々の弊害が起ります、徳川時代には家族主義が餘りに形式に束縛された爲め甚だしき弊害を惹き起して居ます、當時は義理と人情とは衝突するものだと考へて、義理とは絶對の束縛を意味して居ました、然しこれは人生の根本の信仰が誤つて居たので、義理とは人情を含める義理、人情とは義理を缺かざる人情でなくてはならぬ、茲に眞の統一があり人生の道徳があると思ひます、彼の子息の嫁を離縁する爲め多くは家風に合はぬとの口實を作るが、次の嫁も亦同じ口實で逐ひ出す、其弊風

て、一から十まで細目を設けて其通りに教授をして行くのであります、そして少し變つたことでも云はうものなら直ぐお目玉である、自分も斯様な講演を致しますと或はお目玉を喰ふかも知れぬ、現に自分の同僚にも其例がある、此のやうに規則すくめで教へさへすればよいのならば、小學校の教師など何萬と養成せずして、文部省に大蓄音機を据え付けて、型通りの文句を吹き込んで全國小學校に配布すれば教育の能事足りとも云へるではありませんか、全體窓の形はかう、靴脱ぎの置き方はかうと一分一厘規則づくめにやらうとするのは、元締をするのでなく同じく千變一律に養うとするやう方でありまして、であるから有爲のものは、こんな窒息するやうな空氣の中には堪えかねて飛び出すものもあれば又中には軟化するものもある。

恁様な傾向は獨り自分が關係して居る教育界のみならず日本の家庭や商家の中にもある、私が今日横濱から歸る汽車の中で商家の番頭風のものか話して居るのを聞きましたが、其處の主人は大變なやかまじやで主は今日でも決して少くはない、最近此が爲めの夫婦心中の實例を二三見ました、又九州大阪附近に親を殺した惡逆無道の子をも出しましたが、此等が子供が從來の家庭を呪つた例證であつて、到底千變一律に育てることは善くないことでもあります。

全體今日の人間は各々服從の反面には反抗の性質を持つて居るので學校でも家庭でも社會でも壓制を加へる時は非常な反抗を引き起し、到底何日まで控つても眞の統一は出来るものでない、茲に法華經の藥草喻品には吾人の奉すべき眞の統一主義が説いてある、三千大千世界に満ちて居る種々の草木、或は大或は中或は小、赤白黃青花の色々水濁れて枯れんとする時、豪雨沛然として一過し天晴れぬれば無數の植物再び生色を帯び、大は大、小は小、黄は黄、赤は赤各々活々として一草ども其恩恵に漏るゝものはない、而して此雨は之れ同じく天より降つた一味の雨である、佛の智慧も亦此の如く廣大無邊にして差別あるものではありませぬ、吾等の精神は或は上根上機中根中機下根下機或は

正しきもの或は曲れるもの、千差萬別到底草木の各々異つて居るが如き比ではありませぬ、試みに世界十五億の人間同じ顔のものを採つて見ても決して有るものではありませぬ、ライオンは宇宙間同じもの二つなしとの哲理を説明しましたが、此位の事は哲學者の説明を待たずとも明かでありまして、境遇感情欲望等皆人に因つて異り、又同一人でも時により處によつて代つて行くもので此性質を曲げる事は出来ませぬ、然るに佛の智慧は彼の天雨の如く此千差萬別の一切衆生に平和と智慧とを與へ、之を喜んで無上道を成就して佛道に入らしめらるゝもので、これが眞の有り難い統一主義であると信じて居ます。

如何しても無理に壓迫しやうとすればするだけ反抗も強くなる筈が床板までも突き貫いて成長する様なもので、人も之を善導すればこそ順直に育つが壓抑すれば曲つてやも頭を出さずには居ない、遂には爆發することさへ珍らしくありませぬ、佛の智慧は衆生の根柢性質によりて之を導き遂に一乗の大道に引き上げて下

カラが出て、佛教でさへあれば何を拜んでも宜しいなど、いつて恰も癡病的思想を傳播した時代もありませぬ、此の如き病的思想は遂に眞言の信仰を生み出しまして、大日を中心とさへして居れば諸尊何れを拜んでも構はないといふ考を懐くに至りました、然るにこれは單に眞言家のみならず日蓮宗までも今日に至つて其弊を受けて癡病的信仰を持つて居るものは尠くありません、ヤレどこの祖師だイヤ厄除のお祖師様だの何處其處のお狐は全儲の神だなど、騒ぎ廻はつて居る、甚だしいのは狐が妙法大明神の號を貰つて居るが其は日蓮宗から頂戴して居るのださうです、若も今日日蓮上人が出られたならば眞言亡國どころか却て日蓮宗亡國と呼ばれる、かも知れぬ。次に又厭世他力の信仰の盛んな時代もありまして慧心や法然が唱へたのであります、此は亦一向専念の行き過ぎで、唯自分さへ安心すれば人は奈何でもいゝといふ様な個人主義を發揮して居るので恰度胃病か神経衰弱にかゝつた者と同じやうである、然るに日蓮門下にも恚る病人は尠くない、お

さるものでありまして藥草喻品の譬の如きものであります、現代の教育法と法華經の教育法とは反對でありまして、法華經の方法は善巧方便を以てして各人を千變一律に束縛せず各自に自由の活動を許して置くので、但し其元締だけを確手與へてそして遂には佛知見に至らしむるものであります、茲に大なる統一主義があるのではありませぬか。

さて吾々は翻つて我日本國の統一主義を觀察するの必要がありませぬ我國の歴史は此大なる統一主義を行つて居るものであつて、勿論時代によつて興隆變化はありましたが實に不思議なる統一の歴史を持つて居るので、我文明を外國の文明に較べて見ると西洋では英國が最も日本に似て居ります、奈良の正倉院に往つて御物を見せしても印度支那の色々な器物美術彫刻品樂器佛像經卷繪畫等がありまして、單に亞細亞大陸のもの、みでなく歐羅巴大陸のものも其粹を聚めて保存されて居りますが、併し此間には各種の弊害があつて、聖德太子の如な偉人の出られた後に惡しき意味のハイ

題目さへ唱へたら何でも彼でも御利益が有ると思つて居るのは此手合の病人であります、如此病的傾向は單に一宗一派の問題でなく人心全般の傾向であります、禪宗にしろ律宗にしろ何れも此例に漏れない、又何れの時代でもこの病が付き纏つて居るので畢竟一種の時代病であります、然るに幸にも我國には此んな疾があつたにも拘はらず、治療を加へて眞の癡病に罹らなかつたのであります。

比叡山は一時眞言にかゝれて慈覺智證等が全く眞言に降つて居たのですが、横川の川上には天台の清流が傳はつて日蓮上人は之を汲み來つて天下に傳へられました、下剋上の有様を呈して居つた北條時代にすら皇室を犯し奉つたものはありませぬ、信長が天下一統の政緒を開き、秀吉が遂に天下を統一して徳川三百年の幕政となり遂に維新の王政復古となりました、此間には儒教にも西洋文明の法律等にも弊害はありましたが此等の種々の分子を集めて今日まで傳はつて來たので、即ち有形無形の事物を世界各國より輸入し來つて

之を矯正しつゝ今日に及んだのであります、そこで今日まで保存し來つた文明を如何にたゞき上げるか、今後の一大問題であります。

抑も明治維新の改革は徳川三百年の通商上の改革とも云ふべくして進取の精神に轉化したものではあるが其維新たる所以は實に王政復古にあると信じます、而して王政復古とは天祖以來歴代の皇室が國家の中心となつて、庶民は其袖に縋つて危難を免れ皇室は益其御威光を顯はされたものでありますから、復古とは決して其總てを普通りに返すといふ意味ではありません、建國の大本は天照太神の徳を以て表はされて居るので、太御神は光明の神たると同時に秩序の神様であります、日本書紀にはこの御子光彩明かにましまして六合を照し給ふと云ふ風に記されてありますが、日の神の御徳は明かに眞理に契へる者で日の姿を採つて我國の旗印とされて居る、王政の精神は即ち此處にあるのであります、支那人はよく王霸の辨などといふことを謂ひますが、眞の王者たり天下の君たるものは我國の天

い者が善くありません、現に今の學者の中でも西洋思想の皮相だけを見て内を見ず、或は消化して居ても消化の仕方が能くないものが多いのであります、彼の眞言の出來損ひやら日蓮宗の出來損ひのものは、恰も腹一杯に腐敗物が滯滞して居るのと同じ様なものであるから之を排出して終はねばならない、即ち此意味に於て世界の文明を集め得る丈け集め消化して其適せるものは取つて以て發達せしめて往くのが我大日本帝國の天職であります、又嘗に集めるのみならずして其元締を確乎しなければならぬ、其元締は何ですか、久遠の主師親であります、人はあらゆる文明の中心に此久遠已來の主師親あることを忘れてはなりません、外形は異つて居りましても久遠の信仰を持つて居るものならば吾人と同化し握手し得るものである、如此意味に於ける統一主義の天職を吾人は自覺せねばなりません、さて其久遠已來の大人格は佛智に依つて其本體を顯はして居るのであるから、其佛智の本體を顯はすことが即ち開顯であります、で此根本さへ顯はれたな

子様で世界中を照覽する徳の有るお方でなければなりません、強者が權利征服の力による威嚴、血族が同一であるといふ點から尊敬せられるのでは眞の王者でなく覇者である、大理想を顯はし玉へる神徳中心の皇室は我帝國に限つて居るのであります。

明治維新の精神は開國進取を旨とすべし天地の公道に基くべし庶民に至る迄各其志を得さしむべしとの御詔勅に明かに表はれて居ります、又この建國の徳は古今を通じて謬らず中外に施して悖らずと仰せられ、實に皇祖皇宗の御遺訓であると申されてある、復た軍人勅諭の武勇を尙ふべしとか質素なれ忠節を重んずべし禮儀を正しくし信義を重んずべしとの五ヶ條の御聖訓は皆之れ天下の公道人倫の常經を示されたもので、古往今來我帝國の根本理想として綿々相傳へ來つたのであります、此根本理想を失はずして世界の文明を消化攝調して行く所に王政復古の眞の意味が含まれて居ると思ひます。

然るに外國の文明を取り入れましても消化して居なければ其末葉は自然に明かになることは、丁度上野の山を太陽が照せば満山の草木が皆この光に因て抱括せられて居る様なものであります、我日本の統一は國民が自ら徳六合に輝ける久遠の主師親を本として此徳に背かない様にする心掛がなくてはならない、そして若し此徳に背いて居るものがあつても排拒せず、之を引きつけて抱括してやる位の元氣がなくてはならぬ、即ち彼も亦如來の子として吾人の主親師たる久遠の如來に牽きつける覺悟を要するので、純圓一乘の我國機であるからは社會主義とか無政府主義とかを凡て抱括濟度してやるべきではありませぬか、悪しきは之を教へ相提携すべく同化せしめねばならぬので、決して此等の輩も恐るゝに足りませぬ。

以上の如き理合であるから眞の統一の爲に久遠の開顯をしなくてはなりません、この思想の熟しない中から大風呂敷を廣げては甚だ危険であるから、顯本主義の中心を固めて置て而る後に統一主義の大風呂敷を廣げなければなりません、日蓮聖人が花は根に歸り眞味

は土に止まると仰せられたが、其花にしても盆栽的に育てずして、百花皆各の特色を大に發揮せしむる方法でなければならぬ、日本の盆栽の如く切つたり曲げたり人工壓抑を加へては、各自其自我の特色終失つてをふから實際の美も減損されてしまひます、天然のまゝに成育した花に誠の美しさはある、で其花は秋になつて凋落して土に歸し木の養ひとなり、又暖き春に逢ふて再び美しい花を咲かせ、斯くして年々歳々賞美の中心となつて居る、人の信仰も亦さういふ處に根本があるので、一年限りで消えてしまふのでなく常住不變の永き生命を有つて居ることが信仰の根本であります。又日蓮上人が我れ日本の柱、ならむ我れ日本の大船とならむ我れ日本の眼目とならむと三大誓願を起されたが、之も亦矢張り統一主義開顯主義を言ひ表はして居らるゝのであります、日本の眼目とならむとの眼目とは智慧の門で、心を照す光の門を指し、凡ての物を觀る光、即ち世界中の極美なるものを取つて以て眼に入れんとするの意味である、日本の大船とならむとの大

## 信仰實驗談

大誓院抄 矢野 茂

諸君、此の宏壯なる統一閣が建設せられ一同相會する事を得まして、我が聖祖の遺訓を研鑽致しますのは、誠に喜ばしい次第であります、昨日は本多大僧正の有益なる信心と統一の本領に付まして委しいお話があり、其他先覺者諸君の有益なるお話がありました、不幸にも用事がありました爲に、終迄坐席に列る事を得ませなんだのは遺憾に存する次第であります。

此の宏壯なる統一閣が出来ましたと同時に、此中に相寄り垂訓を研究致します諸君は、彌現代に於ける自己の大なる責任を負たのであります、不肖なる私共も亦此のお仲間入を致したい、併し夫には如何なる決心をし如何なる覺悟をしたならばよいかと申しますと、お互は丁度此のコップの中の水の一分子が、相集まつて一杯の水をなして居るやうなものであるから、只一二の立派な人があるからとて、凡べて其人だけに

船は、大船の何物たりとも満載し尙且つ其以上に少々ものを積載し得る餘力あるが如く、統一主義の根本力を有し賢明なる眼目を有して居るものは、何物に向つても充分なる餘力があるから、昨今世間で囂しい問題になつて居る米價の騰貴位に別にくよくよすることはない、又船を動かすには一定の方針がなくてはならぬとの意であります、次の柱とやらんとは一屋の家にしまして大黒柱がなくては駄目で、日本の大黒柱が無かつた時には到底も日本を支持して所期の針路を進むことは出来ません。

以上即ち三大誓願の中には抱衿の精神と中心を忘れないといふ精神とが表はれて居るのであります、呉々も忘るべからざることは花は根に歸り眞味は土に歸るとのお言葉でありまして、花は木の一部分であり根も亦木の一部分でありますから、何れが缺けても木は駄目である、人としても國としても不具者に成つて終つて完全なる發育は遂げられませんが、であるから何れの時代に於てもこの統一と開顯とが必要なので、根本の確立と其根本を顯すことは即ち開顯が大切なのであります。

類つて此處に集まる丈ではすまぬ、吾人も諸君もお互に滿腔の熱誠をこめて、法の爲め國の爲めに盡さん事をお誓致したい、本多大僧正がお話の如く、居眠り念佛や鉢案題目は、形式的信者のなすことでありまして何にもならぬ、御聖訓には「法華經を餘人の讀み候は口ばかりことばばかりは讀めども心に讀ます心に讀めども身に讀ます色心二法あそばしたるこそ尊く候へ」とあります如く、法華經を身に讀めば我身活きながらの本尊である。

私は信仰實驗談といふ題を出して寄りましたが、今日お集りになつてゐる方々の中にも、厚い信仰を持つて居る方がありますので、私如きものか斯かる題でお話するのは甚だおこがましいようにも存じますが、併し今日は私自ら日常行つて居る事を少しくお話申さうと思ふのであります、で話の筋は御本尊の人格とでも題した方が適當かと存じます、曾て高島君は天晴會で宇宙の人格といふ事に就てお話せられたこともあります、が、是も身に法華經を讀み身に法華經を行じたならば、

夫が即ち宇宙の人格と云てもよいだらうと存じます、そこで私は此身に法華經を讀み行するの徒が、此の閣内に集まつたならば、此統一閣の一大面目であらうと思ひます、身に法華經を讀み行するといふ事は非常に困難の事の様ではあるが、併し此の建築杯に置まして、種々の材料や手数の入とは異つて、只自己一人で身に讀み行する事が出来るので、是が私の實驗談といへばいへる所であらうかと思ふのであります。

近來頻りに静坐呼吸法といふものが行はれますが、私は是に就て、宇宙人格建設として利用して見たい事がある、其前提として申上げて置たいことは、私は曩に本多大僧正から御本尊を頂きましたが、私は毎朝其の御本尊の御前に合掌禮拜し、先づ方便品量品調讀夫からお題目百遍唱へて、後呼吸法をやるのであります、之を私は御本尊式呼吸法と申します、呼吸法にも岡田式と何式とか色々あるやうであります、要するに呼吸法は吸にも呼にも口を開てはいけない、鼻から吸ひ鼻から出すやうにせなければならぬ、今一は呼吸には

## 日本と西洋との異點

内務省書記官 中 川 望

今回此統一閣が落成して、斯く盛なる式典を舉行せられるに就きまして、内務省からも出て何か通俗教育に關する講演をやつて呉れとの事でしたが、豫て私は本多上人と懇意な所から、只今出席することになつた次第であります。

然し皆様に御満足を與へることは難しい、殊に本日は先に種々面白い話があつて、其後に出てお話しすることは甚だ趣味の少いことと思ひますが、折角の御依頼ですから、聊か心付いた事を述べて其責を塞ぐ考であります、で演題に就ても、お集りの方々に依り、夫れも撰ぶべき必要がありませんが、本日は老人の方もまた若い方も見受けまので、餘り難解の學理的なお話しは止して、成る可く誰人もお解りになる様な方面の講話を試みる心算であります、それで「西洋と日本の異なる」例を擧げて、私の考を述べることに致しま

一定期間を取ねばならぬ、私は鼻から吸ひ三秒乃至四秒時腹に抑へ丹田に入れて置き、さうして又吐き出すのであります、御本尊を窺ひまするに、中央に南無法妙蓮華經のお題目がありまして其左右に釋迦牟尼佛多寶如來上行等の四菩薩を始め、其他の諸天善神等が三段に分座せられて居りますが、私は先南無法蓮華經を最初に唱へまして、夫から上段の右次に左、夫から中段下段といふ順序に諸佛諸菩薩の御名を殘らず心に念じつゝ、深呼吸をするのであります、斯く致しますと御本尊は常に信仰の對象として掲げてあるのみでなく、そこに御本尊の難有味と意義とが、吾が身心の全體に入りて味識するに至り、自己の全身心が尊とき御本尊の意義を體し得るのであります、私は是を以て宇宙人格とか御本尊人格とか申したのである、希はくは諸君、御本尊が信仰の對象として前に備へてあるばかりでなく、御本尊が身に入て起居動作を掌るといふ様になつたならば、初めて上人の御調誡の如く色心二法の法華經を行する者といひ得らるゝと思ふ

せう。

諺にも「處異れば品異る」とある如く、實際西洋の風俗習慣と日本のそれとは非常に其趣きを異にして居るものがある、現今交通機關が大に發達して、處に依つては本邦内よりも外國へ行く方が却つて近い所もある、従つて西洋の風習に始終接觸して居るにも拘らず、日本と西洋とは凡べての點に於て少からざる異點を存して居る。

其例を擧げれば、先づ第一に文字が異つてゐる、西洋のは所謂の蟹文字で横になつて居るが、日本のは縦に書き下すのであります、或學者は這んなことを言つた、即ち人の眼は横になつてゐるから横文字の方が讀むに便宜であると、又或人は、否や縦に見下すので矢張り日本流が宜いと言ふ、然るに今日では看板杯を見ても西洋流も日本流もある、兩方とも用ゐてゐるものもある、要するに日本人の眼は縦横無盡に活動して居る、此點に於ては、恐らく世界無比と思ふ。

家屋の戸に就て見ても、西洋のは向へ押すか手前へ



引くかして開くのであるが、日本のは左右に開ける、之れは前の眼を働かせるのは正反對であります、又人が挨拶するに、日本人は互に頭を下げる、若し西洋人が見たならば、其丁寧にお辭儀して居るのが何となく倒れかゝつてゐる様に感ずるでせう、西洋では唯だ舞蹈をする時のみ頭を下げる、普通の場合は帽子も脱がねば頭も下げない、英吉利の婦女子は外出散策の際には勿論、室内に於ても帽子を被つて居る、但劇場にある時には他の観客を妨げる爲め脱帽してゐる、而して髪を結び白き紗の様なものを頭巾の形にして頭に被つてゐる、禮服も各異つて居るが、女は膚の見へる位な極めて薄い物で無地の半袖になつた服を着るのでありまして、無論帽子を被るが、近來歐洲に流行のモースナリハットの如きは此テールよりも大きい、婦人の歩行して居る姿は恰も茸の様に見える、全體、西洋婦人の服は裾が廣くなつて歩行の際は掃除してゐる様な恰好ですが、また近來餘り裾の廣がつたのは流行しなくなつた、斯く日本と西洋とは様子も異つて居れば、事

斯く種々異なる點はありますが、最も著しく誰でも知つてゐるのは、日本は下駄であるが西洋は靴であることでありまして、之れは建築物、衣服、凡べて關する所でせう、所が今日の日本の風習は如何ですか、御承知の如く眼を縦横無盡に使ふのみならず、服装には洋服もあれば和服もある、其他有ゆるものが西洋の風習をも包容し而も能く消化して居る、現に此統一閣の建物も亦日本の特色を發揮して居る様に思はれます。

(2) 次に結婚に就て一言すれば、……結婚といふのはもと西洋の譯語であつて、日本では婚姻といふのが正當であります……西洋の方が年齢に於て遅い、亞米利加の如きは獨身者も少くない、之れには種々原因もありませうが、富豪家の者は多く十八九位で結婚する、そして其持參金や諸道具に何千何圓の大金を費す、又普通の者も非常な散財しなければ婚姻が出来ない、従つて一般に其時機が遅れ、獨身者もある譯であります、其異なる點は西洋は自由結婚であるが、日本は然でない、即ち、其文字に於て既に異なる如く、西洋の結婚は夫婦

を爲す方法も亦同じくない、例へば人を呼ぶにも、日本人は手の内側を呼ぶ人の方へ向けて招く、之に反して西洋人は手の内側を自分の方へ向けて人を呼ぶ、尤も来い〜と呼ぶ理窟から云へば西洋のが當を得て居るかも知れぬ、又日本人は彼の人此の人と指して示すが、若し西洋人に開んことをしたら非常に嫌はれる、然し物を指す場合には矢張り此物彼物と指定します、それから日本では他人と邂逅した時に「あなたは何處へお出になりますか」と能く尋ねますが、西洋人は之も嫌ふ、自分の用を達す爲め其目的地へ行くのに、他人が干渉する必要はない失敬な奴だといひます、又眼配で表はす、一體西洋人は眼づかいや手振がナカ〜上手であります、が手振に就て日本人と異なる一つを舉ぐれば、何かの爲に驚いた時には日本人は其驚いた瞬間に手を少し上方に舉げて指を廣げるのですが、西洋人はその正反對に下げるので、日本人から観れば驚いたのか何か一向解らぬ、又服装に就ても西洋では男は右襟で女は必らず左前に區別してゐる所もある。

を中心として居るが、日本はの單に夫婦間の親和のみでなく家庭に於ける關係に重きを置いて居る、故に古は婚姻若しくは婚禮と言つて結婚とは言はなかつたのが明治の世に至り外交盛に行はれるに至つてから、其語も用ひられる様になつた、然し自由結婚だから男女が道路で相會して婚約をなすかといへば、決して然ではない、互に相信じ、媒介者なくして結婚するのであるが、其れには男女が相當の年齢に達すれば其親は非常に苦慮して、結婚せしめる、西洋では男女が會合する機會は屢々あるので、其場合に於て能く人物の如何を觀察して、その好人物と認められた後でなければ眞に相互の交際を許さない、それで多く許婚の如き結婚であります、然し親が其妻を指して自家の妻とは呼ばぬ、此點が大に日本と異なる所で、日本では嫁入をすれば、上には兩親舅姑姉兄などがあり、下にも弟妹などがある、如何に夫婦が相親しみあつて居ても、其他の人々が氣が合はぬ爲めに離婚する様な事實もある、即ち家庭に最も重きを置いて居るのであります。

私が曾てミスビヤスに寄港せし際、経験した一例であります。宿からステーションに行くに其處に幾多の馬車があり、そして麗はしい花輪を携へ、禮服を着けた紳士淑女が誰かを見送りしてゐるものと想はれた、聞けば新婚旅行との事であつた、少焉して二人は彌汽車に乗りましたが互に挨拶もなく謝辭もなく、唯ハンカチーフで涙を抑へて居る、一人の五十歳の男は聲を擧げて泣き出した、彼は花嫁の實父であるとのことであつた、私は其理由を聞けば、それは全體西洋では一度嫁入りをするれば其女は既に親と別れる、即ち實父の方からいへば、其娘は最早自分の娘ではなくて、夫に屬するもの、従つて生別同様であるので、彼は聲を發して泣いたとの事でしたが日本では斯んなことはなから、

今假りに斯んな事實があるとしても、日本では喜怒色に表はさずてふ孔孟の教に因り、如何に悲しいこと雖も面に表はさない、然し西洋では之に反して喜怒哀色に表はすを好ししてゐる、軍人ではへも手はなして

處にも依るが……一里進んで偵察すれば立派にわかる所を、實際其處迄行かないで、少し小高い丘などに登つて、安全で能く見えるといふ所から、遙かに敵狀或は地勢を觀察して、それを實際確かめたかの如く報告する者も往々あるといふことであります、之れが即ち物事を相表裏視する惡弊と思ふ、假令人が見て居やうとも、また見て居なくとも、決して自己を偽る如き明暗表裏すべからずといふ觀念がなくてはならぬ、彼等が忠實なること職責を重んずる事は此にある、物品を預けるにしても別に切符も要らない、札を持つ必要もない、又時計の修繕をするのに更に受取證も何もなくとも決して間違ひはない、日本人ならば何となく安心が出来ない様な感もあるが、斯の點は遙かに西洋人が正直であります、従つて外國人を取扱ふ上にも、殆んど外國人といふ別殊の觀念はない、私も外國人と知り合ひとなつて種々話もし、經驗も経ましたが、唯一度相會して宿泊することがあつても、恰も親類の人を迎へるが如き態度で、特に「これはあなたの室ですか

泣いてるのを見る、是等の相同じからざる所は、程面白く感じます、彼の千代萩の(淨瑠璃劇)に表はれたる思想は確かに日本人の特色を發はして居る、此特色は非常によいのであります、……凡べて物は一利一害で……又一方から觀察すれば之れに伴ふ弊害がある、所謂喜怒色に表はさずといふのは内心と事實とは相表裏して居る意味にもなる、西洋の喜怒色に表はすを好すといふ方は天真爛漫で欺かない意味にもなります。

軍隊の例で言へば英國の如きは歩兵、騎兵、砲兵、工兵等の軍服を畫き、日給幾何若しくは一週幾らと、其俸給を示して、軍人になれば斯く立派な服装と着けて而も是だけの俸給が得られる、志願者は申出でよと廣告してある、海軍も亦その方法で艦體や服装や給與の金額を示して希望者を募る、軍隊は彼等に依つて組織せられて居る、言はゞ雇ひ兵であるが、其忠實に自己の職責を重んずる點に至つては、日本も亦學ぶべき所甚だ少くない、斥候兵などに至つては必らず事實を確めて之を上長官に報告する所が日本人には……「ら」と言つて、一室を探定して極めて親切に待遇して呉れる、そして却つて自分の家には「日本のお客さんが宿つた」と喜び誇る位であります、私共は到底此程度の懇切な心は起らない、實に心措きなく接待する點は大に吾人の學ぶべき所と思ひます。

日本では「人を見れば盗人と思へ」といふ諺がある、成る程然らだと思はれる事もあります、然し西洋では開なことは要らない、此點は西洋の長所であります。

次に日本人が西洋に學ぶべく、最も注意すべき所は時間を確守することであり、日本でも靜岡時間とか、熊本時間とか、京都時間とか、其他凡べて其地方地方に依つて時間が豫定よりも遅れるのが例であります、西洋ではそんなことはない、労働時間でも工場法なるものが制定せられてある、其規則に依れば一日八時間乃至十時間その業に従事する事になつて居る、英國などでは、土曜日は半日、日曜日は一日、全市通じて休業する、郵便配達も此日は一回汽車も常より回数

を減ずる、但し煙草屋だけは特に店を開いて居る、日曜には旅行もやらない、若し旅行して過て何事か出来れば、彼は日曜に旅行したから罰が當つたのだと謂ふ位であります、又下層社會の人々は多く公園に行つて遊ぶが、公園の門戸は早い時は午後一時、遅くて午後三時に開かれる、そして博物館の如きは、特に無料縦覧を許すのであります、英國は晝よりも晚餐の方が御馳走をするが、日曜日に限り午食にご馳走する、それは日曜には下女の手を勞せずとも食事に差支ない様にしてある、凡べて秩序整然たるものであります、一家の主婦が他の客に室を見せる時は、一週間の炊事獻立の時間表と箒箭の中に白巾の洗濯したものがチャンと整頓してあるのを以て誇とする、此白巾は食事の際常に用ふるものですから、それを洗濯し整頓することは婦妻たるもの、務めであつて、是を以て一家の秩序が知られる、手拭の如きも一日に二回位は取替へる、日本では使所の手拭などは随分汚れたのがある、洗濯するにも西洋では毎日／＼でなく、別に洗濯日が定め

思ふ。

公園に就て觀ても、日本の公園には彼所には蜜柑の皮が散らしてある此所には紙くづが放つてあるといふ有様で、前に來た人は後から來る人が迷惑しやうが如何しやうが我不關焉の態度である、後に來る人の事を考へたら斯んな事は出來ない筈であります、各人が公德心を有すれば利己的な事を行らないのみならず、如何に雑沓せる場合でも秩序を紊すことはない、英國王が崩せし時、十三箇國から集つて其靈柩に尾し、極めて雑沓であつたが、而も道に送るに列を正しくして、道路に水をまいて居るのかけられる様な者は一人も無かつたとの事であり、日本では葬式の時などは、後でトーンと押寄せて人が往復するが、英國では往來する者が必らず左右の兩側を通行するので、すぐ後から押し寄せる様なことはない、然し各人が自ら自己の態度を保ち、一地方全體が此の覺悟を有し、漸く國民一般に及ぶならば、所謂國民風を善美ならしめることが出来る、之れが極めて大切な事であると思ふ。

てある、其他何曜日には硝子をふくとか凡べて日割を作つてある、女中の仕事にしても朝何時起床、何時にコヒ、何時迄に斯くするといふ様に規律正しくやる、従つて八百屋や魚屋の如き用を一々問ふ必要もない、西洋の婦人が多くの兒女があり、家政があるにも拘らず、一面に於ては交際社會にも出られるといふことは、此時間の使用法が宜しきを得て居るからであります、日本では、短時間で済む用でも雑談に耽つて、空關で一時間も立話しをして、それから歸るといふ有様で一人の應接で早や半日も費す、一般が違ふ風であるから、假令自分では時間を確守する心算でも他人の爲めに實際に行はれない、私等も事務の半ばは殆んど應接で終つて居る、地方でも何かの用があつて訪れても、ナカ／＼其用事を話さない、先づ煙草の二三本も喫つて、やつと話ししかゝる、斯んな事はお互に不利な事ですから、西洋と日本との異として看過せずして、彼の公德を重んずること、正直なる點、秩序の整然たる所、空間の經濟、是等の善い所は大に注目し學ぶべき點と

日本は歴史的に觀察しても、支那文物の輸入を容れ、又西洋文明の影響も受け、能く之を消化して居る、寺院の如き又家屋の風も支那西洋の風を日本化して居る、又衣服にしても和服の外に洋服もある、日本人はまだ和服の方が自由になるので、洋服を脱いで和服に着替へてアグラでもかいて居れば、何となく自分の家へ歸つた様な氣持になる、が西洋人から之を見れば日本服は寝衣の様に思はれて平生着るものとは想はれぬ。

其他西洋と異なる所は數多ありますが必ず西洋のが良いとは云へない、短所も少くない、又日本の風習もよ程善い長所が存して居る、然るに近來ダイヤモンドの指環であるか、其他西洋の流行を真似る風も随分行はれてゐる、是等凡べての現象を概観するに所謂過渡の時代で、比較的贅澤になつて居る、之等の點に就ては充分經驗して須く其長を取り短を補ふべきであります、地方に行きましても草葺の家根もある、トタン屋根もある、神社をペンキ塗にし、瓦斯燈を點ける、と

云ふ様な所もある、然し一方には古代の風を保存することも亦必要と思ふ、西洋では此古物保存といふことは非常に力を注いで居る、観光團等が日本の特有なる風を慕ふて、其面影の少いのを觀て、非常に慨嘆して居る、白耳義のプラセル府の博覽會に行つた時に、一人の婦人が、背後は白と赤と縫ひ合した着物で、頭には更紗を縮めた様な、大きな櫛をさし、赤い簪をさした異様な風を装ふて居る、之は多分見世物と想つたが然うでなくて、和蘭や白耳義に於ける獵師町の婦人の風俗であるとのことを聞いた、而も彼等は立派な家庭の婦人であるといふが、之は其古風を尙ふ風習であります、英國等でも古物を保存することには、大金を投じてもやつて居る。

要するに、公德を重んずること、正直、秩序等の特長々所と認むべき點は之を取り用ひて、其短を補ひ、益々國民の風を改善しなければならぬと思ふ、個人に於ても、家庭に於ても、學校に於ても、一般擧つて此自覺を有して立つならば、必ず美風精華の發揚は期せ

### 統一閣開堂式辭

統一閣成る、本化立教開宗の記念聖日を卜し、開堂の式典を擧ぐ。

四月二十七日午後一時、大僧正本多日生猊下は、大導師として五十餘名の僧員を率ひ、儼肅なる音樂大法會を修し、左の慶讚文を捧讀せらる。

#### 慶讚文

本門常住の三寶諸天善神の御前に跪き、一會の大衆を代表して、謹みて啓き上る慶讚文一章

夫れ、國は法に依て昌へ、法は人に因て貴しと、若し明治の昭代に處して法華一實の大教を興立するなくんば、其罪果して誰にか歸せん、某甲等、之を思ふ毎に慚愧措く所を知らず、信は純善の地を求めざるにあらざるも未だ金剛心に達せず、智は日月の光を希はざるにあらざるも未だ朦霧の迷を知らず、徳は清蓮の香を慕はざるにあらざるも未だ染穢を去らず、是れ某甲等、四衆と俱に夙夜に懺悔し發露する所なり。

ずして明かなる事と信じます。

日蓮上人曰く

主の御爲にも。佛法の御爲にも。世間の心根も。吉かりけり吉かりけりと。鎌倉の人々の口々にうたは

れ給へ(編遺)六四五頁  
(崇峻)天皇抄

茲に統一閣の工事成を告げ、本日より三日間に亘りて恭しく開堂の式典を擧ぐ、是れ日蓮大上人立教開宗の記念日を選びし也。

今奉安する所は閻浮提第一の本尊、修行する所は醍醐一實の妙行、講演する所は二世安穩立正安國の妙教なり、是れ則ち四恩に報答し四願を成滿せんが爲めなり。

日蓮大上人の聖訓あり、時を知るを大法師となすと又曰く、大鬼神あつて法華經を弘通せば身を投ぐべし、紙なくば皮をもはぐべし、厚き紙國に充滿せんに皮をはいで何かせん、

日什大正師の遺誡あり、同器用の者打替はり打替はり、帝都の弘通を勵むべしと。

統一閣の經營は、内に此の聖訓と遺誡とを奉じ、外に時代の要求に應せんと欲するの徹衷に出でたり、建築及維時の資金は、盛泰寺安盛寺常林寺の合併に依り、他は村上貞藏中村祐七安川繁種三氏の寄附、及び篤志家の淨財に基き、設計は森田洪氏信念に住

して意匠丹精を凝らし、旭ヶ森祖岩の靈蹟畫は、小笠原丁氏現場を巡拜し、齋戒沐浴約半歳を費して畫く所なり、又三寺の合併に關しては、今成乾隨藤崎通明の兩氏及各寺檀家總代の盡力に依り、事務は井村日威三上義徹の兩名之に當たり、建築の棟梁は森安之助氏にして、各終始一貫、能く報答の誠意を竭せしなり。

本日此處に集まれる四衆は、本宗宗務廳員、大學林教職、監督布教師、評議員、宗會議員、東京府下寺院住職等と、京都總本山妙滿寺婦人會會員、盛泰安盛常林三寺の檀徒、東京第一義會會員、妙教婦人會會員、東京天晴會會員及各地天晴會會員、東京地明會及各地地明會會員、講妙會會員、正法護持會員、澗治會會員、橘香會會員、其他隨喜參列の清信士女なり。

本日の式典に參列せんと欲するも、事情の爲果さざる者其數幾干なるを知らず、或は淨財を寄せ、或は祝電を送る等、何れも誠意を捧げて統一閣の開堂を慶讃せり、是偏に佛祖の威徳と明治時代の政す所なり。

乾爲師は「我宗信仰の基礎」と題して日蓮上人信仰の根本義を説き、中部監督布教師野口日主師は「道場」の意義に關して經釋による精神を述べ、大僧正本多日生師は時代の要求と日蓮主義の勃興、現代の改善及救濟の方策と日蓮主義に關して明解なる論斷を與へられ、時正に午後六時なりしも、聽衆の大多數講説を求めて已まず、故に法輪を續行して法益を與へ、九州布教師朝倉俊達師は宗教信仰と愛美との關係に就て論じ、東海道布教師文學士國友日斌師は日蓮主義に就て哲學的方面を説き、西部監督布教師能仁事一師は國民道德の基礎は法華經の教理に存する所以を述べ、萩原啓門師は佛陀の慈悲と信仰に就て懇切なる教演を張り、晝夜七回八時間の講説にも無有懈倦の態度を存し、求道の熱誠信念の健實、眞に讚歎に値するものあるを見る。東京及各地より開堂の式典を敬讀し、祝辭及祝電を送りしもの無慮數百に及ぶ、其主なる者を擧ぐれば左の數十通なりとす。

茲の日、天晴れ地明かに、花開いて鳥歌ふ、一步も歩まず靈山淨土に詣で、本佛の慈光に浴するの感あり、集まれる四衆は恣まゝに歡喜法悦に入り、新たなる道念と信仰とを喚起せり。

仰ぎ願はくは、三寶諸天、某甲等、四衆の信念を哀愍して、大陣已に破れたり若黨共二陣三陣につゞいて、加業阿難にも勝ぐれ天台傳教にも超へよかしとの聖訓を身讀せしめ、法輪常轉、皇運永昌、二世安穩、立正安國、四恩報答、四願成滿ならしめ給へ爰に三寶諸天、殊には日蓮上人、日什大正師、日經上人、並に三寺開基日國上人日好上人日恩上人の報恩謝徳に擬し上る、哀愍納受し給ひ、重ねて請ふ、一四天下十方法界周遍利益、仍而慶讃文一章如件  
明治四十五年四月二十七日

大日本帝國 本化沙門 聖應院日生

稽首々々

斯くて法會終りを告ぐるや、講演會を開く、聽衆一千三百餘名、今成僧正開會を宣し、東都監督布教師野老

祝電

東京天晴會は謹而統一閣の竣成を祝し併せて廣宣流布の誓願を果されんことを祈る

東京天晴會

祝電

謹而統一閣の竣成を祝し併せて法蓮の萬歳を祈る

京都天晴會

祝電

統一閣の落成式を祝す

天晴會姫路支部

祝電

開堂式を奉祝す

大阪天晴會

祝辭

統一閣の竣工を祝し將來の健全なる發達を祈る

豊橋天晴會支部 櫻井祥造

祝辭

統一閣の開堂式を祝し日蓮主義の興隆を祈る

長州萩天晴會

統一閣開堂の式典に列り法悦の情押へ難く謹みて祝詞を申し述ぶるになん

東京地明會幹事 足立 禮子

祝電

開堂式を祝す

盛岡地明會

祝電

統一閣竣工し開堂の盛典を祝し國の爲り日蓮主義の發揚を祈る

青森地明會

祝電

開堂を欣ぶ

姫路地明會

祝電

謹みて開堂式の盛典を祝す

身延山貫主 日慈

祝辭

謹んで統一閣開堂の盛典を祝し奉る

東京第一義會

祝辭

國運啓典の秋に膺り本化の大教嚳然として昌ふ、所謂天晴れ地明かに、正立て國安きものか、爰に聖門の先覺、法國冥合王佛一乘の妙旨に則り、帝都形勝の地を相し、大教宣傳の中央會堂を建設し、名けて統一閣と云ふ、本日その開堂の盛典を舉行せらる、本會々員亦志を同するの故を以て、招に據りて席末を汚すの光榮を擔ひ、欣喜不能措、虔で祝意を表す

東京帝國大學 第一高等學校 澗治會代表加藤文雄

祝電

統一閣竣工し慶讚式を擧げらる之を祝す

旭川第七師團長 林 太一郎

祝辭

謹んで統一閣開堂の式典を祝し併せて正法弘布を祈り奉る

立教開宗の聖日を卜し、日蓮主義宣傳の道場たる統一閣開堂の式典を擧げらる、願ふに統一閣は、時代に適應したる帝都に於ける最初の道場なり、庶幾くは開顯の智光長へに輝き、普ねく利生の悲願を成辨せられんことを誠恐誠惶

祝辭

東京講妙會 吉田 珍雄

祝辭

品川正法護持會

開堂の盛典を祝す

京都 坪永 日監  
金光 孝碩

祝辭

謹んで統一閣の竣工を賀し事業の愈々益々發展せんことを祈り奉り

文學博士 三上 參次

祝辭

法界の樞軸國家の柱礎たる日蓮主義を宣傳普及すべく、中央機關として統一閣建設せられ、茲に立宗開

祝辭

謹んで統一閣開堂の盛典を祝し奉る

東京第一義會

祝辭

國運啓典の秋に膺り本化の大教嚳然として昌ふ、所謂天晴れ地明かに、正立て國安きものか、爰に聖門の先覺、法國冥合王佛一乘の妙旨に則り、帝都形勝の地を相し、大教宣傳の中央會堂を建設し、名けて統一閣と云ふ、本日その開堂の盛典を舉行せらる、本會々員亦志を同するの故を以て、招に據りて席末を汚すの光榮を擔ひ、欣喜不能措、虔で祝意を表す

東京帝國大學 第一高等學校 澗治會代表加藤文雄

祝電

統一閣竣工し慶讚式を擧げらる之を祝す

旭川第七師團長 林 太一郎

祝辭

謹んで統一閣開堂の式典を祝し併せて正法弘布を祈り奉る

教の聖日を卜し開堂の盛典を擧げらる、不省等幸にして此席末に列す、何もの、光榮か之に如かん、今や天徳昭々上に輝き、下國民自覺の氣運漸く現れんとするに際し、國民的傳道を振起すべく、本閣の成立せるは豈に法國の大慶にあらずや、嗚呼、立正安國の名教は、こゝに滋々宣揚光顯せられ、一切の思想道徳を開顯統一し、進んでは王佛冥合圓浮同歸の大理想に到達すべきを憶念し、滿腔の至誠を以て悉しく祝禱を捧ぐ

栃木縣栃木町 本化行學會代表 高木 久次

祝辭

貴閣の落成を慶賀し謹で祝誠を表す

駿州三保 田中 智學

祝辭

謹で統一閣開堂の盛典を祝し將來日蓮主義發展の策源地たらんことを祈る

北海道 荒川 智會

祝文 上總 中村 乾 信

祝辭 盛典を祝す

統一閣開堂を祝す

祝電

本門法華宗大獅子吼會

千葉縣尙風會

祝辭

物質的文明の發展に伴ふて精神的文明の渴仰に切迫したる現代に於て、廣く各方面清節の人士に依て併鑽せられ、熱烈なる敬慕を捧げらるゝもの、是れ本化大聖の人格と主義にあらすして何ぞ、先づ國家を祈りて後須らく佛法を立つべしとの聖訓瞭々たり、今や吾人は統一閣の成立を見て眞の佛法の立つべきを知る

宗紀六百九十一年の本日をトし、開堂の式を舉行せらるる吾人如何ぞ、滿腔の熱誠を以て爲國爲法祝せざ

祝電

統一閣開堂を祝す

姫路 中村 祐七

祝電

謹で統一閣開堂の盛典を祝し長へに閣浮唯一名教の發揚地たらんことを祈る

岡山日蓮主義信徒一統

祝電

統一閣竣工を祝し法運隆盛を祈る

金澤 松本郡 太郎

祝辭

開堂式舉行に際し謹で慶讃の意を表す

白蓮華社

祝電

開堂式を祝す

廣島 大橋 日襲  
廣島 島田 顯 恕

祝詞

岡山教壇代表 中川 事 顯

茲に顯本法華宗岡山教壇を代表し、謹で統一閣開堂の盛典を祝し、併せて正法隆昌國威發揚を祈り奉る

祝辭

金澤 墨 照 玄

統一閣の竣工を祝ふ

伯耆 窪 田 純 榮

遙かに盛典を祝す

祝電

國柱新聞社 山川 智 應

開堂式盛典の効果を祈り奉る

祝文

京都總本山妙滿寺 高田 定 治 郎  
京都總本山妙滿寺 大橋 武 三 郎  
京都總本山妙滿寺 秋山 覺 治 郎

東京中央會堂として統一閣成るを告ぐ今茲に謹でその開堂式を祝し併て將來宗勢の大發展を佛祖三寶の靈前に是れ祈る

祝文

西村 し な  
大橋 つ る  
富 永 せ い  
米田 と く

統一閣竣工爲法國慶賀に堪へず謹で祝意を表す

伯耆國 市 橋 龜 藏

祝辭

謹みて統一閣開堂の盛典を壽さ奉る  
東京妙教婦人會

東洋大學 藤井 覺 常  
橋香會幹事

祝辭

謹而統一閣の落成式を祝し奉る

豊橋顯本婦人會 服部 ひ さ 子

祝辭

東京布教道場統一閣の開堂式を祝し併せて廣宣流布を祈るになん

京都總本山妙滿寺 國光婦人會代表者

祝電  
遙かに盛會を賀す

備前和氣 原田容廣

祝辭

正法の興隆は國家の進運と其生命を共にす、聖祖日蓮上人死身弘法の獻身の大獅子吼は、やがて帝國無窮の國運を扶翼する絶對の權威たらんか、茲に感泣して統一閣の落成式を祝し奉る

岡山第六高等學校  
日蓮宗御會代表者

小西俊平

祝辭

統一閣建築落成を奉祝す

上總 木村乾中

祝電

開堂式を祝す

上總 光本會龍  
上總 龜崎日憲  
下總 前田日應

祝辭

岡山横山藤吉  
謹で統一閣の開堂式を祝し大に正法興隆を祈る

岡山 久城信一郎

祝電

開堂式を祝す

大阪 梶木日種  
同 長尾猶之介  
同 郡山庄兵衛  
同 和井田寛丹

祝電

開堂式を祝す

盛岡 渡邊元教

祝電

統一閣開堂式の盛會を祝す

越後高田 土屋要助  
同 小島仙太郎  
同 深海兵平  
同 小川金太郎

佛憲流布の世紀に鑑み、法華一乘の弘布するの秋、無上轉法輪の基趾、統一閣の竣工せしは、衷心喜悅措く能はず、爰に謹で祝意を表す

見付第一義會幹事 吉田堅晴

祝電

統一閣開堂式を祝す

遠州 西山日諺  
同 白井日慶

祝電

度で統一閣の落成を祝す

三河 長谷川日濟  
泉州 高木本順

祝電

帝都弘通の一大會堂の盛典を祝し將來潮の満るが如き隆盛を祈る

播州 高田日暢

祝電

統一閣開堂萬歳

其他數十通に上る、來賓には千葉縣より飛山日甫井上日冲宮川光熙藤崎通明大川日教秋葉統一中田日達山岡會俊渡邊乾航里見日潮小竹俊雄堂亮雄成島泰行森川寛行師等の布教師を始め、石井貫一高橋寅吉氏の信徒の參拜あり、豊橋より國友日斌師櫻井天晴會幹事、京都より祝辭に記せる信徒と野老僧正金光坪永師等參列せられ、岡山より能仁僧正久城氏等數名、大阪より古谷夫人、栃木縣より本化行學會員服部大塚氏等數名は三日間に亘りて熱誠祝意を表し、相州より萩原布教師、青森より中田布教師、長州より朝倉布教師、其他數百名の僧員信徒は遠隔の地より上京せられ、開堂式典の光彩を添へたり。

二十八日、純正日蓮主義講演會を開く、聽衆一千百餘名、午後正一時司會者開會を宜し、本多日生師は予の宗教觀と題し、各宗教の教理信條が現代救済に靈力を存せざる所以を痛論して、日蓮主義の卓越せる教義を詳説し、矢野大審院檢事の信仰實驗談、佐藤海軍大佐の自強將命と統一、五島子爵の精神修養、姉崎文學



博士の統一と開顯、各講師何れも堂々の論議と深刻なる批判を試みて、多大の印象を與へ依て以て日蓮主義の特長を發揮せらる、當日餘興として伊東燕尾氏の日蓮上人の立教開宗の講談、琴三味線尺八の三曲合奏の菊水と松上の鶴との二曲は、石丸葉奈和福島幸子田中彌生石坂里童氏によりて演奏せられ、午後七時宮岡海軍中將發聲にて陛下の萬歳を三唱し閉會を告ぐ

二十九日午後一時、現代教育の缺陷を補ひ人道の通義を誦ゆるが爲め、調育と娛樂とを併せたる清遊會なる名の下に大會を開きぬ、秋庭正道氏は上野の義人と題す事實上の改過遷善にかゝる趣味講演を爲し、堺市より隨喜參列したる村上禮子は琴曲を奏し、片桐正氣氏は幽雅なる謠曲を語り、筑前琵琶は橋旭翁氏によつて謠はれ、岩城盛美氏の洋樂は優美清楚の妙音を發し、内務書記官中川望君は本誌掲載にかゝる有益なる訓育的講演を試み、大に國民的自覺を促がせり、此日聽衆千三百を超へ入場を謝絶するに至る、午後七時石橋海軍少將の發聲にて陛下の萬歳を唱へ終りを告ぐ。

開堂の式典、三日間二十五時間の講演餘興に亘り、計三千七百の聽衆、能く敬虔の態度を以て主義鑽仰の衷誠を捧げ、本化聖教の佛子自覺に到る、之れ吾人の深く敬意を表する所也とす、特に篤信家山田豐次郎福原豐次郎鈴木金藏吉田珍雄渡邊好吉兼賀秀次郎新宮嘉作の諸氏専ら受付及應接の任に當り、吉田芳緒子久富久子兼賀春子新宮鈴子天田とよ子田中とめ子田中菊子山根こう子長谷川よね子野口夏江子金阪重猪子鈴木もと子鈴木てつ子長谷川かね子大島よし子の各女史は、何れも來賓接待のため奔走せられ、海野竹琴中西芳山渡邊源治郎氏は數日に亘り準備及接待に力を致し、眞に道の爲身讀の妙行を積まる、東京府下寺院住職は異體同心の聖訓により、各其方面を擔任して一切の整頓を圖り報答の衷誠を表し、爰に三日間、佛陀諸天の哀愍知見に因りて何等の障礙なく開堂の式典を終る。(三上生拜記)

空高き統一開や春の風

岡山 横山前山樓

**東京 天晴**

五月十一日午後四時帝國大學講義部にて例會の講演は開かれた諸名士の題を接して集まるもの六十餘名定刻に到り幹事の開會によりて能仁等一君は登壇し日蓮上人の神聖觀と題して上人の國體觀に就て詳細なる論議を爲し小林文學士は實生活と經典の眞價と云へる講題にて教育家宗教家の現代思想の見地を批判し人生生活と經典の交渉に就て痛切なる論評を加へ強平なる激勵を與ふるものありきこの講演は記者幸に大意を筆記せしを以て次號に掲ぐるを得べし晚餐會には五十餘名の同志食卓にありて意氣互に合し縦横の論議熾なりき

**東京 地明**

五月十二日統一閣樓上に開く會員の集まるもの四十餘名能仁事一君は信仰の靈華と題して信仰の功徳と色讀との關係を詳説して多大の感化を與へ木多大僧正は人身觀に就て現在生活の苦痛の狀態より説き起し佛知見開發の法義に進み富林蓮華の實體等を懇説して吾人の地位を自覺せしめ一同に益々信仰の熱火を興へて歡會したるは曉鐘上野に鳴るのこゝろなり

**知見會**

五月十日午後一時より淺草新谷町慶印寺に開き山根會長導師にて修法を爲し午後二時より石川顯隆師の信仰の喜びに就て法悅的境遇を説き信仰の大事を奨め關田僧都の日蓮主義の貴と實生活に必須なるを知らしむるものありて多數の聽衆に感化を興へたりとは眞に

**國明會**

有任有望の會にてあるを認むになん五月二十日同會本部に開く集まるもの甚だ少きも極めて熱心篤信のものなるが故に多くの冷めし聽衆よりも効果と雖有味を覺ゆ定刻吉永幹事の上人活動の動機と効果に就き三上本誌記者は法華經は空理空論にあらずして實際的教義なるを述べ色心二法の關係を懇説せられ日蓮主義の卓越せる長所を紹介せられたりと云ふ

**實業青年會**

同會は五月五日第三周年記念大講演會を開き聽衆百餘に到り何れも求道文學士能仁僧正等の名士各得意の廣長舌を振つて日蓮主義の最勝なる所以を述べられ頗る感會を極めたりき

**思恩**

五月五日午後六時より例會を開いた小西法學士及京都より上京の野老僧正はいとも懇切に信仰の大事に就て詳説せられ野田僧正また熱誠を以て身讀法華の意義を論じて處世の要訓を誦へ聽衆に報答すべき根本精神を傳ふるものありたるは吾人の深く感服して已まざる所なりとす

**妙教婦人會**

五月十六日午後一時より統一閣樓に開く修法後今成僧正は母として佛と題し佛陀と吾人との關係は父子なりとの前提を踏きて佛陀の慈悲の方面を説き之に續りて向上の進路を辿るべきを懇諭し木多大僧正は信仰の正路

**信行會**

淺草三筋町中西芳山氏は堅き信仰を持して常に主義の爲に盡されつゝあるが五月四日例會を開き夏目智誓師と秋原啓門師の隨喜して特に法輪を轉ぜられ幾多の方向より日蓮主義の貴と實を紹介して道行く人々に感化の法雨を灑きたりと云ふ

**房總 教報**

房總における日宗寺院は客年の決心に基き一致聯合して五月十八日千葉町公園堂に大講演會を開く聽衆五百餘名にして地方一流の紳士競ふて登壇したるが中村記信師開會の辭を述べ五島子爵の日蓮上人と慈悲に就て温かき涙ある上人の人格を紹介し福田僧正の日蓮上人の法圖と題して法佛冥合の大理想と開宗統一の素願を論明せられ木多大僧正は統一神教の意義と國民精神の統一に關して滔々數萬言を發され佛學博士の宗教政策は現代思想の表象として注目すべき活問題にして之を縱横に論議せられ大に宗教に對する病的思想を矯正し宗教に進むべき方向を示され深き印象を興へて喝采裡に閉會を告げたり

**東海 道教報**

四月十八日午後七時三十分例會を開く聽衆八十名金子亮一君の所信坪内君の教育小話吉田聖晴君の日蓮主義の特長金澤高等女學校長の佛敎の修

養上に於ける價值等について直撃熱烈なる講  
演あり、養老各深く傳教の特長と日蓮主義の眞  
髓とに觸れしもの、如く午後十時三十分何れ  
も歡喜と法悦とに充ちて散會したりと云ふ

△西正會

客年十一月颯々の隆聲を擧たる東海道頭正會  
は爾來盛に等鐘を亂打し日蓮主義の鼓吹につ  
とめ今其殆の顯著なるあり三月二十六七の  
兩日官長現下の御登山を期とし聘して臨時大  
會を擧げり當日現下には一時四十分驚愕着  
妙立寺總代青年及小學生徒一同の出席を受さ  
せられ夫より隨車にて妙立寺に入り給ふ午後  
二時吉田師の前講に次で現下は悦可安心の奏  
樂中に登壇し給ひ上人の御誦歌三首に付最も  
懇なる説教あり夜は定刻未だ至らざるに聽衆  
堂外に溢れ實に八百名を數ふ午後七時に至る  
や白井齋都の兩會の辭に次ぎ「信仰」なる題  
下にて國友文學士の前講あり次で現下は「法  
華經の妙處」なる題下にて登壇し頌偈の音聲  
を振はせられて滿堂の聽衆を醉はしむ明れば  
二十七日聽衆約五百午後二時白井齋都の兩會  
の辭に次ぎ現下は「報恩」なる題下にて御講  
演あり午後三時三十分に至るや現下には御乘  
車時刻切迫の事として御降壇直ちに隨車にて驚  
津轟に趨けせらる依て顯正會發起者一同と聽  
衆並に總代青年の一同隨喜の涙を吞下り現下を  
見送り穿出度閉會を告げたり

二十七日夜閉正會遠夜なるを以て何會講演  
を催す雨天なりしにも拘はらず熱心なる來聽  
者五十小學校教師佐原氏の平和の妙樂加藤氏の  
養國齋翁師の所感吉田氏の上人の警句等各師

道「國語の教訓會後述」不滅の美觀原田日  
勇「宗教實踐の調整並仁事」師にして各辯  
士の熱烈なる大主義の鼓吹には三百の聽衆を  
して精神約百覺を喚起せしむるものありき

「翌二日」は規定の法會を行ひ特に宗門功  
勞者追吊法會を設けて敬誼の意を表し大橋野  
口兩僧正の説教によりて醇乎たる信仰を契め  
午後七時より大講演會を開き「宗教界の維新  
増田聖道」法華經の中心高田日暢「法華身讀  
史關田資叔」本田大僧正は信仰の妙處と題し  
て本佛と吾人の關係より説き起して信仰の價  
値及効果を詳論して佛性の發揮を促かし甚大  
の感動を興へたり而して當日の參觀者には天  
晴地朗と云へる講演冊子五百部を頒與したり  
「十三日」前日に同じく森嚴なる法要を修し  
珠に法界萬靈のために法味を供へ野老僧正の  
説教あり午後七時より京都天晴會と合同して  
日蓮主義の特長を紹介すべく大講演會を開き  
「法蓮住會の期高木本願」信仰の力國友日  
斌「國教確立の急務野口僧正」日蓮主義の特  
長本多大僧正の熱心なる廣長舌によりて四  
百餘の聽衆は悦として醉へるが如く其感化の  
力大なりしを推知するに足る

同日午後十時より大書院に於て懇親會を開き  
布教上に関する所感演説數語ありて法蓮の高  
歳を三唱しこゝに大法會の終了を告げたりし  
が客年に比し各地信徒の參拜せるもの其數多  
きを加へ頗る盛會を呈したりき  
△京都天晴會 五月一日午後七時より二條妙  
滿寺に於て天晴會例會を開き講師小林一郎君  
は「日蓮上人の樂天主義」と題して酒々二時

の長廣舌を振ふありて十時閉會  
二十九日白須賀妙壽寺に開會該寺は素葺茸  
の破屋なりしが現任高橋師の奮勵努力するあ  
りて瓦葺に改造し一新面目を呈するに至りし  
を以て其開堂供養を兼ね大講演會を開く午後  
二時より開堂入席の式典を修し七時より講演  
に移る高橋師の開會の辭に次ぎ加藤師の獨立  
自齋齋師の自置自治山本布教師の如來室  
等の講演ありて午後十時閉會明けは三十日午  
後四時高橋師の開會の辭に次ぎ齋齋師の本佛  
の感應吉田師の唱題の意義等の講演ありて  
養丈夫の餘興等ありて頗る盛會なりき

△四月八日知波田村妙安寺に釋尊誕生會を  
兼ね午後八時より例會を開く聽衆約八十吉田師  
は日蓮主義本願小學校校長は祖先崇拝に就て各  
熱烈なる講演ありて多大の法益を興へ午後十  
時三十分閉會せり

△三河縣本教會

四月十九二十の兩日三州澤美野田法華寺に  
顯本教會大會を開く當日は龍川教務部長長州  
の齋齋後進師國友文學士山本布教師等の珍客  
あり午後三時西山師の開會の辭に次ぎ齋齋後  
進師は信仰の要義に付懇切叮嚀なる説教あり  
て午後五時三十分閉會明けは夜に移る聽衆約  
百五十午後八時に至るや吉田師は開會の辭國  
友文學士は予が信仰の經驗最後に龍川教務部  
長は理想化する題下に登壇簡明直截なる講演  
あり聽衆の何れも多大の法益に満ち午後十一  
時閉會明けは二十日正十二時より壯觀なる法  
要を修し午後二時より再び講演を開く聽衆百  
七十吉田師の上求菩提下化衆生山本布教師の

間に互り平易痛切なる辯論を以て現代思想の  
缺缺を述べて日蓮主義の特長美點を發揮し  
て現代に適切なる所以を痛論せられたり會す  
るもの七十餘名なりしが何れも日蓮主義の靈  
光に觸れ研鑽の資料を得たりと悦び合ひつ  
つ散會を告げたりと云ふ

神戸

神戸高等商業學校に於ける日蓮講演  
會は臨時會を催はし幹事の改選を  
行ひ四月より加納眞一安達勇太郎田  
村眞一の三氏擔任となり講師堀木日  
種師も合同し一同校庭に於て紀念撮  
影を爲し又研究方針に就て議する所ありき五  
月八日午後三時より同校教室に於て第八例會  
を開き堀木日種師の「人格完成」に就て約一  
時間餘に渉り日蓮上人の抱負人格なること  
を説き第二第三の日蓮たるの抱負を以て立つ  
べき旨を述べ今日も學年變りにて新入會者多  
く講演後茶話會を催はし研究質問等に花を咲  
かせ午後五時解散せりと云ふ

大阪

△天晴會第十七例會 今回には特に顯  
本宗四部講習會連夜演説會に引續き  
て四月九日夜七時半より東區西高津  
中寺町蓮成寺を會場として開會せり  
池田幹事の挨拶に次で左の講演あり  
日蓮主義より見たる補正成 關田資叔君  
眞觀政要を讀みて日蓮主義に及ぶ

教報

三教會同と日蓮主義 本多日生君  
關田講師は樋公の遺跡を實査したることより  
説起して法華信仰の狀態を説き次に野口講師  
の講演あり最後に本多講師は三教會同の眞意

信仰の價值等の講演ありて五時三十分閉會を  
告ぐ

△四月二十一日田原富行寺に大會を開く午後  
二時より簡單にして然も壯觀なる法要を嘗み  
三時より講演に移る聽衆約九十齋齋一乘師の  
開會の辭に次ぎ齋齋文學士は齋齋天晴會幹事  
として八面玲瓏と八方美人なる題下にて上人  
の玲瓏の如き人格を説き國友齋都は日蓮上  
人の主義及人格に付廣長舌を振ひ午後五時閉  
會明けは夜は九時より閉會聽衆一百前田師の  
開會の辭に次ぎ野中師は上人の安心加藤師の  
隱居論齋齋師の日蓮主義吉田師の四聖山本布  
教師の國と人齋齋文學士の自ら田毎に行け國  
友師の信仰に就て各自一流の辯を振はれ午後  
十一時三十分閉會したりと云ふ

△豐橋教會 豐橋市に於ける日蓮主義の勢  
は旭日東天の狀態にして余宗派を席捲風靡し  
つゝあるは世の識る所なるが國友文學士が全  
力を傾注して天晴會に趨人會文書布教に亦地  
方に出馬して盛に法鼓を鳴らし信徒を増加し  
て教線の擴張を圖られ色心二法の信行に勵ま  
るゝことばに贊と亦將來有望のことなれ

京都

△京都二條妙滿寺に於ては毎年四月  
十一日より三日間大法要會を行ふ同  
會には顯本法華宗管長本多日生師大  
導師を勤められ亦全國各寺院の代表  
者等五十餘名の出席者あり法要は午  
前午後二回に分ちて修行し亦晝夜二回の講  
演を開く十一日午後三時より野老僧兩師の  
説教ありて信仰の實き所以を説き午後七時よ  
り「開會の詳山本布教師」清淨の法水有田友

教報

を闡明して世間の誤解を釋き國家對宗教を論  
じて日蓮主義の特長を述べたる聽衆二百餘名  
午後十時退閉會を告げたりしが頗る盛會なり  
き

備前

備前の地に法華信仰の篤信者多く當  
に衆に先つて身讀法華の行に勵みつ  
つあるが客月本多大僧正の一行大阪  
講習會に謁を留めらるゝを機とし和  
氣町小學校に講演會を開き原田日勇  
師の開會に次で關田講師は法華身讀の要義に  
就て祖書の精神を述べ本多大僧正は佛敎の本  
領に就て純正なる信仰を契め統一的本尊を説  
き明なる聽衆二百餘名にして頗る盛會なりし  
と云ふ

教信

備前の地に法華信仰の篤信者多く當  
に衆に先つて身讀法華の行に勵みつ  
つあるが客月本多大僧正の一行大阪  
講習會に謁を留めらるゝを機とし和  
氣町小學校に講演會を開き原田日勇  
師の開會に次で關田講師は法華身讀の要義に  
就て祖書

# △教學財團第五回 評議員會

議定の如く四月十四日京都總本山内教學財團事務所に開議せらる、是れより先き第一回評議員は全部滿期に就き寄附行為第廿三條の規定に基き有功會員以上の合議に依り選定せられし評議員は左の如し

東京府	鈴木日雄	井村日成
野口日主	註川眞應	
築谷要作	市川榮吉	
磯野	鈴木金藏	
安川		
京都府	乾爲	西村治兵衛
西村吉右衛門	林誠一	
瀧野喜八郎	村上篤三郎	
野阪孫作		
三宅六藏	三宅庄次郎	
橋本善助	中村祐七	
小野善吉	宇垣卯三郎	
須山茂三郎	能仁事一	
鳥取縣	市橋龜藏	市橋馬之助
廣島縣	入江善平	
福井縣	齋藤長右衛門	
千葉縣	林喜太一郎	大多和平助
	岩佐春治	高橋一郎
	石井貫一	平山由次郎
	山本熊之助	大野傳兵衛
	中田日遼	山岡會俊
	中村乾信	横溝日業

栃木縣 見目 清  
午前十時開會、發會者十五名委任狀提出者十九名計三十九名出席、席次を定め鈴木金藏氏を議長に選舉す、次で理事監事の改選を行ふ、當選者左の如し  
理事 市橋龜藏 中村祐七 三宅六藏  
監事 西村吉右衛門 須山茂三郎の五氏  
中田日遼 小野善吉 林誠一の三氏  
右終つて姫路支所の決算報告、品川支所の勸募成績報告あり、次で四十五年度決算を決議し散會したり、當日決議せられたる四十五年度收支豫算及四十四年度收支決算左の如し

## 明治四十五年度收支豫算

收入總額		二千四百六十八圓三錢
第一項	基金及現金	二千四百六十八圓三錢
第二項	寄附金	五百八十五圓
第三項	前年度剩餘金	四百九十七圓七錢
第四項	前年度剩餘金	四百九十七圓七錢
支出總額		二千四百六十八圓三錢
第一項	事業費	二千八十圓
第二項	本山費	三百二十二圓
第三項	學費	四百四十圓
第四項	布教費	五百二十圓
第五項	福要寺院保護費	二百八圓
第六項	法要費	百圓
第七項	大法會費	百圓
第八項	事務費	二百三十五圓

## 明治四十四年度決算

本年度募集基金勘定		募 集 金	七十二圓
本年度募集基金勘定		勸募費充當金扣除	六十六圓
本年度募集基金勘定		基金繰込	八十二圓
本年度募集基金勘定		振替貯金手数料費	十五圓
本年度募集基金勘定		次年度繰越金	三圓二十錢
本年度募集基金勘定		次年度繰越金	三圓二十錢
本年度募集基金勘定		募 集 金	七十二圓
本年度募集基金勘定		勸募費充當金扣除	六十六圓
本年度募集基金勘定		基金繰込	八十二圓
本年度募集基金勘定		振替貯金手数料費	十五圓
本年度募集基金勘定		次年度繰越金	三圓二十錢
本年度募集基金勘定		次年度繰越金	三圓二十錢

備考

前年度一依り本年度收入金二千二百二十三圓十五錢八厘ト支出金二千二百八十三圓三十四錢ヲ對照スル時ハ金五十七圓十八錢二厘ノ不足ヲ生ズ依テ前年度繰越ヨリ補足ス

### 本年度總決算

一	金四千三百二十九圓三錢	本年度繰込基金
一	金七千九百五十七圓七錢五厘	基金部前年度繰越金
一	金九千九百一十五圓七錢	前記常用部剩餘金
一	金五十六圓九錢六厘	振替貯金課貸越金
一	金五十六圓九錢六厘	振替貯金課貸越金
合計	金一萬二千四百二十八圓九錢八厘	

### △北海道江別法華寺敷地 寄附金領收報告

金拾圓	京都 西村治兵衛
金八圓	豊橋 國友日城
金五圓	京都 坪永日監
金五圓	京都 西村吉右衛門
金五圓	遠州 西山日監
金五圓	三河 長谷川日濟
金五圓	茨城 江野澤榮全
金參圓	東京 三上禎子
金參圓	東京 川崎泰秀
金參圓	三河 白井日慶
金貳圓	遠州 高橋道碩
金貳圓	遠州 吉田堅晴
金貳圓	京都 内田誠次
金貳圓	大阪 碓名主健
金貳圓	京都 北村通正
金貳圓	京都 森義観

### 北海道江別町法華寺

金貳圓	京都 金光孝順
金壹圓	京都 川崎英照
金壹圓	廣島 島田顯怒
金壹圓	福井 増田聖道
金壹圓	京都 吉川平兵衛
金壹圓	京都 秋山嘉兵衛
金壹圓	京都 秋山覺二郎
金壹圓	京都 渡邊妙信
金壹圓	名古屋 藤原誠
金壹圓	三河 武藤照惠
金壹圓	伊豆 三島中村日雅
金壹圓	三河 朝倉一乘
金壹圓	同前 前田圓整
金壹圓	三河 猪野貞立
金壹圓	京都 村上ウノ

# 新刊 錄內拾遺

## 標 註 艸山集

社會は如何に本書を見たるか

▲社會政策曰く……艸山集三十卷は實に深淵元政上人の性靈を發揮せるものにして收むる所、詩集あり、文集あり加ふるに法資慧明の會て上人に侍するの筆受せる集抄を以て頭注となし又慧明の艸山要路會注を收録して參看に便し又上人の和文として將た其至孝を萬世に傳ふべきものとして最も珍重に價すべき身延行紀並に其注疏を添ふ。卷首には石井家の家譜を録し又上人の略年譜を附せるなど讀者に便せる所多し……上人艸山に隱栖してよりは、明人家陳元贊等と應酬し雅思淵才一世に冠絶せり活動的なる妙宗に上人の如き淵理を喜ぶ隱士あるは激浪怒濤の傍山に沙彌の眠れるが如く奥床しき限りと云ふべし

▲中外日報曰く……上人の行狀及文章詩歌の卓越せるは世既に定評あり今茲に贊するを要せざるべし只注意すべきは上人は單に文章詩歌の達人にあらずして上人が文墨の背面には切實なる修道眞摯なる信仰敬慕なる人道の大義の流れ出づる深き淵源なるを忘るべからず上人の偉大は實に茲にあり是れ上人が我文學及び佛敎史上に獨歩の地位を占め他の窺難を許さる所也其述作を通じて上人の人格を認むべし

▲法華中興の碩徳の半面を窺ふを得べし道に志あるもの文學を嗜むもの上人の人格に觸れんとするものは僧俗の如何を問はず一讀せざるべからず、印刷鮮明にして誤植なきは亦喜ぶべし

▲毎日新聞曰く……本書は元政の祖先に長明翁好あるを知つて元政を知らぬ様では未だ文壇の過去を語るに足らぬ……日本文壇の家集で古來風流の士の愛讀した者である……殊に本書は活字上の

四月廿 和裝正信 金壹圓四拾錢  
日發行 洋裝正信 金壹圓五拾錢  
送 料 金 各 八 錢

▲二十名補缺入會を諾す

原本三十卷附錄身延行紀一卷  
合刻菊版七百五十餘頁  
正價 貳 拾 貳 錢  
郵稅 拾 貳 錢

### 宮殿●須彌段

### 前机●幢幡

大 販 賣

御來店の節は陳列場へ御來車被下度は是れ迄とは一層勉強強任一切各宗の佛具陳列仕置候



### 正價 三法堂佛具發賣目錄

佛具と唱すれども此の種類數品有之候を以て一々記載する能はず。依て特に佛具正價附發賣目錄書を作製致置候に付御入用の御覽あれは、寺院佛具の御入用品一切の御覽あれ其の正價附の品に左の通り

- 佛畫一具切
- 佛具金一切
- 佛具銀一切
- 佛具銅一切
- 佛具木一切
- 佛具竹一切
- 佛具紙一切
- 佛具布一切
- 佛具漆一切
- 佛具土一切
- 佛具石一切
- 佛具瓦一切
- 佛具骨一切
- 佛具肉一切
- 佛具血一切
- 佛具毛一切
- 佛具髮一切
- 佛具爪一切
- 佛具齒一切
- 佛具舌一切
- 佛具唇一切
- 佛具頰一切
- 佛具頤一切
- 佛具頸一切
- 佛具項一切
- 佛具背一切
- 佛具腹一切
- 佛具腰一切
- 佛具膝一切
- 佛具足一切
- 佛具手一切
- 佛具腕一切
- 佛具肘一切
- 佛具腋一切
- 佛具肩一切
- 佛具背一切
- 佛具腰一切
- 佛具膝一切
- 佛具足一切
- 佛具手一切
- 佛具腕一切
- 佛具肘一切
- 佛具腋一切
- 佛具肩一切

●佛具卸部 通小橋西入 本舖 三法堂藤田總次  
●小賣部 通大橋西入 三法堂佛具陳列場

大僧正本多日生祝下著

## 橘 香 集

大僧正本多日生祝下講述

## 法華經講演集

本書は佛陀觀宇宙觀人身觀等の絶對開顯統一の意義を闡明にし本佛の大慈活躍し日蓮主義の光輝燦然たり日蓮主義者の一讀を薦む

毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵稅五厘 一ヶ年前金六拾  
五錢郵稅六錢 代金ハ振替貯金口座東京一三一九番へ拂込マレ  
トシ此場合ニハ諸料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十五年五月廿五日印刷發行

發行人 井村日成 編輯人 山根日東 印刷人 鈴木日雄

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地 統 一 團

日蓮主義 信行要本

和紙折本新かな附  
並製一部金拾參錢  
上製一部金貳拾六錢  
送料貳錢

聖日。勸請。修法順序。廻向。

方便品。壽量品。自我偈訓

讀。修法用心聖訓之章。跋

文。

播州印南郡西神吉村

發行所 妙信寺

廣告

本會夏期講習會を七月二十三日より三十日に至る一週日間東京市淺草區北清島町統一閣に開く講師は現代日蓮主義鑽仰の諸名士十數名を集む名士及講題は次號に掲載すべし

東京天晴會

統一

第 二 百 八 十 號

日蓮上人の主義に就て

國友日斌

我宗信仰の基礎

野老乾爲

予の宗教觀

本多日生

汝等諦聽

山根日東

近代の主義と日蓮上人

三上義徹

雜纂

